
きらりキラリ

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きらりキラリ

【Zコード】

Z5634T

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

芹沢恭太、30歳。とあるサッカーチームに所属している。本業は、ボロ旅館の旦那さん。夢と現実の折り合いをつけ、これからも生きていくのだろうと思っている。そんなある日、旅館に外国人の男がふらりとあらわれた。その男は、世界的に有名な元サッカー選手、コージであった。

1

きゅうじゅうこつ、きゅつきゅうさんつ、きゅうじゅうよんつ、
きゅうじゅうじつ

「あー、失敗だ、くそつ」

右の爪先で軽く蹴り上げたつもりが、力を込めすぎてしまつたようでボールはあさつての方向に飛んでいつてしまつた。

失敗という事実は自分だけが知ればいいことなのに、下手くそに蹴られたボールが腹を立てたのか、その一秒後、周囲の人々全員の聴覚に訴える結果となつた。早い話が、飛んでいつたボールが客間の窓ガラスを割つてしまつたのである。

やべえ、あれ、人の泊まつてる部屋だよ。
芹沢恭太は割つてしまつた窓へと早足で駆け寄つた。

「大丈夫ですかあ」

などと、ぽつかり空いた窓枠から内部を覗き込んだ。

外出中なのか、人の気配はないようだ。

恭太はとりあえずほつと胸を撫で下ろす。

しかし、他の部屋の窓が、ひと部屋またひと部屋と開いていつた。宿泊客たちが、なにごとかという顔で恭太のほうを見ている。

「あ、すんません。なんでもありませんから。ちょっと窓ガラスが割れちゃつて」

割つちゃつて、がこの場に適切な表現なのだが、わざわざいうことでもあるまい。リフティングしていたのを見ていた人には、分かってしまうつてしまつているだろうけれど。

「ター坊、あんたまたやつたね！」

老婆が怒り心頭といった形相で飛び出してきた。鬼にしか見えない顔だが、恭太が人間である以上、この老婆もまあ人であろう。芹沢トモ子。恭太の祖母なのだから。

2

宿屋せりざわ。

芹沢恭太が経営している旅館の名前である。

北海道H市の南、海に面してはいないがすぐ近くにある。

H市は、近年すっかり寂れてはいるが、由緒のある観光地。温泉が出て、新鮮な魚介もたっぷり味わえるところだ。

恭太は宿屋せりざわの主人であるが、実際に切り盛りしているのは祖母のトモ子であり、そしてその実権や経験は、恭太の妻である芹沢愛子に受け継がれつつある。しかし立場がなからうと主は主だ。悲しいかな、そのご主人様は、首を掴まれた子猫のように小さくなつて、トモ子に連れられて建物の中に入ってきた。

愛子が一人の女性従業員を連れてあたふたと早歩きしていくところに出くわした。

「恭ちゃん、さつきの音、もしかしてまた

いぶかしげな視線を亭主に向ける愛子。

「もしかしてもなにも、なんにもないよ」

「もしかしてもなにもない、だろ。日本語は正確に使いな。ガラス割つたくせに、なんにもなくないだろ。まったくターゲットたら、サッカーだかなんだか知らないけど下手くそのくせに暇さえあればボーリー蹴つてるんだから」

「下手だから練習してんだろうが」

いわれつ放しも面白くないので恭太はちょっと逆らつてみた。でもやつぱり十倍になつて返つてきた。

「ここで蹴るこたないだろ。下手が多少練習したって変わりやしないよ。そんなことして割れたガラス代以上に稼げるのかい。そもそもサッカー選手だなんていつて、お金かかるだけで一円の稼ぎにもなつてやしないじやないか。多少なら趣味つてことで我慢もするさ。でもこんなとこで下手クソ披露してあげくの果てには窓を割つて。ただでさえ昔に比べてお客さんが減つてるんだよ。これ以上いなくなつたら、どうすんだい」

そしたら、親父みたいにラーメン屋でもやりやあいじやねえか。

と、たすがにそれは口には出せなかつた。いま現在養う家族（どちらかといつと養われている?）と従業員を持つ身として、たすがにちよつと無責任過ぎる発言かなと思つたから。といつのは自分の心へのいいわけで、単にまた十倍返しになるのが面倒なだけだ。

祖母と孫とがそんなやりとりをしている間にも、次々とやつてくる従業員に愛子がテキパキと指示を出している。

従業員全員が去ると、愛子は大きく伸びをした。

「それで、窓ガラスの手配したの?」

「いや、まだ……」

「あたしやつとくからいいよ。恭ちゃん、変なことに頼んじゃうだもん」

いつもの業者だろ。そんなん間違えるかよ。

と思ったが、思つただけで口には出なかつた。屋根修理でいつもの業者を呼ばずにたまたま手元にあつたチラシを見て電話してしまい、そこが悪質業者でぼつたくられたことがあるから。

お金は損するし、馴染みの業者の顔は潰してしまつし、と、愛子とトモ子に散々小言をいわれたものである。

また、従業員が愛子に指示を仰ぎに来た。愛子はにこやかではないうが、かといつてこれっぽっちも不満顔を浮かべることもなく、手早く指示を伝えていく。

観光客自体が以前に比べて相当に減つてきているため、基本は暇なのであるが、そのため従業員数が少なく、忙しくなる時はこのように突発的に忙しくなるのだ。

「じゃ、あたし電話していくから。はい恭ちゃん、じいじいじい

愛子は亭主を押しのけると、フロントの方へと小走りだ。

彼女の後ろ姿をしみじみと眺めている恭太。

ちよつと、逞しく、なりすぎだよな。

結婚したばかりの頃は、仕事のことなんにも分からなくて、なんでもはいはい聞いてくれたのに。

どつちが主人なのか分かりやしない。

だつたらちゃんと仕事すればいいじゃないかと祖母にいわれそ
なことを、心の中で呟いていた。

さて、愛子様の目まぐるしい活躍により仕事は迅速に進み、正午
も過ぎ、ようやく落ち着ける時間が出来た。

従業員たちもみんな集まつて、お茶の時間が始まつた。
従業員、といつても人数も少ないので、ここで、この旅館で働い
ている者をすべて紹介してしまおう。

まず女性従業員。いわゆる仲居さん。

阿比留真弓、五十一歳。十六のころから、もう三十年以上も勤め

ている大ベテランだ。

田頭里子、三十四歳。

石館こづえ、三十七歳。お喋りで、彼女に重要なことを打ち明け
よつものなら、翌日には街中に広まつている。

続いて男性従業員。

岩寺虹夫、六十二歳。もともと、旅館に出入りする植木職人であ
つたが、職をなくし、五年ほど前から従業員として雇つてい
る。

料理人。

片石亨、五十五歳。

富居新平、四十三歳。近くで料亭を経営しており、営業時間外に
こちらに来てくれている。

これに、恭太たち三人を加えたのが、この旅館で働く全員である。
部屋の隅にあるテレビには、昼のメロドラマが流れている。

十四型のブラウン管テレビ。画面の横に、縦一直線に並んだチャ
ンネルボタンがあることから、相当な旧式だと分かる。

あと数ヶ月でアナログ放送も終わりだというのに、このテレビに
限らず旅館全体としてなんにも地デジ対応の準備をしていない。
買い替えるお金がないのだ。

恭太は時折煎餅をかじり、お茶をすすりながら、黙つてテレビに
視線を向けている。うつかり地デジの話をしようものなら、「屋根
修理にぼつたくられてなければ全部屋設置出来たんだけどねー」と

愛子の小言が飛ぶ。

とはいって、アナログ放送終了までにはなんとかしないとな。この部屋は最悪テレビを撤去すればいいけど、客間でそうはいかないからな。今時テレビがないなんて、それだけで相当なマイナスポイントになるし。

草薙の馬鹿野郎、必要もないつてのに地デジだなんだ余計なこと進めやがって。

ホテルはいいよな。電波来てなくたって、エロビデオで儲かるもんな。千円でカード買わせてさ。

ホテルの実情をまるで知らないので、好き勝手な文句をいう恭太。突然、玄関のガラス戸が開いた。まあ、だいたいの場合、突然開くものだが。

「マトバさん、いますか？」

入るなりそう声をかけてきたのは、外国人の男であつた。長身で、がつちりしている。スーツを着ており、一見すらりとしているが、中に相当量の筋肉が押し込められているのが分かる。大きな鼻が特徴的だ。一見若そうに見えるが目尻のシワなどから、四十代半ばくらいだろうか。

中南米に多く見られるような薄い褐色の肌。加齢のためか元々か、頭髪は少し寂しい感じだ。

「マトバ、さん、ですか？」

田頭里子が応対した。さん付けするか躊躇したのは、男が旅館関係者か宿泊客か、どちらのマトバを求めているか分からなかつたからだ。

「旦那さん、お密さまの中には、いないはずですよねえ」

恭太は頷いた。

帳簿を確かめてみるまでもない。もしもマトバなどといつ名前ならば、記帳の際に恭太の印象に残らないはずがない。

もしかして、この人……

「コーへーさん。マトバコーへーさんです」

やつぱりだ。

でも、どうしてうちに尋ねに来るのか。

「的場耕平さんは、もう亡くなっています。一昨日」

恭太は立ち上がった。

「オトトシつて？」

「二年前」

流暢な日本語を喋るくせに、こんな簡単な言葉が分からぬのか。外国人の男は、自分の指を一本、一本と折り曲げた。

「オー」

男は、がつくりと片膝をついた。

恭太が声をかけようと近寄ろうとすると、男はすっと立ち上がった。

「失礼しました。もう大丈夫です。それではまた」

深く頭を下げるが、玄関の外へ出た。寂しげに微笑みながら手を振ると、ゆっくり戸を閉めた。

「なんだつたんだ、ありや」

「さあ。こつちが聞きたいよ」

夫婦は顔を見合わせた。一人の顔にはおつきなハテナマークが浮かんでいた。

2

芹沢恭太はフェイントを仕掛けた。

右のアウトサイドでちゃんと外側へ蹴り出す素振りを見せ、足はそのままボール上を滑らせて、折り返すようにインサイドで内側へ。単純なフェイントであるが、一度連續で来るとは思わなかつたのだろう。今度は見事、長岡巧を抜いた。

油断したわけではないが、ちょっとタッチの大きくなつたところを、あつさりと後藤権三に奪われてしまった。

だが恭太は、すぐさま半ば強引に身体を入れて自ら取り返すと、宇野井聰太へパスを出した。

宇野井聰太は小笠原慎一をかわすと、反転しつつヒールで横へパス。しかし大道大道が感じておらず受け損ね、ボールはラインを割つてしまつた。

彼らがやつているのは、三対三に分かれてのミニゲームだ。

ここは、一応、サッカーグラウンドなのであるが、全面雪に覆われていて、ただの雪原になつてしまつてゐる。

元々は本当にただの野原であった。十年前、細い川に沿つて一部を開拓し、サッカーの練習に使えるよう整備したのだ。

ちょっと雨が降ると靴の裏にベタベタと土がくつついてきて最悪だが、晴れているときは、適度なクッション性を持った快適なグラウンドだ。芝には及ばないが、そんなものはないのだから贅沢もいつていられない。とまあ、これは春から秋にかけての話であり、現在は、前述したように雪に覆われていて、みんなで搔き分けた狭い範囲でしか練習が出来ないのだが。数日も経つと凍つたりまた雪が積もつたりして大変だ。

彼らは、イクシオンACという社会人チームの所属選手である。北海道の、道東ブロックリーグに所属している、将来のJリーグ入りを目指しているチームである。

日本のトップリーグであるJ1を一部とすると、五部に相当する。本当はもつと大人数で練習出来ればいいのだが、みんな仕事に忙しくて集まらないのだから仕方がない。

今日はGKの木場芳樹きばよしきを入れても七人しかいないのだから。運が良ければこのあと何人か遅れて来るかも知れないが、とにかく現在いる人数で出来ることをやるしかない。

将来のプロリーグ参加を目指しているとはい、現在のところプロ契約選手の一人もいない完全なアマチュアチーム。それぞれ仕事を抱えている以上は、このような日もある。とはいっても数年、このような日が非常に増えてきているのだが。

「もう疲れた。シート練習にしようぜ」

後藤権三がどつきかりとしゃがみ込んでしまつた。

「お前、おれと同じ年だろが。まったく。タバコなんか吸つてつからだよ」

恭太は高校時代からの大親友の不甲斐ない姿を見せられて漏らさずにはいられなかつた。まだ三十歳のくせしやがつて。

「バカ、おれ今吸つてないよ」

「今吸つてないだけだろ、今」

練習終わつたら早速一服するくせに。

「酒とタバコは、仕事のストレスがあるからしじょうがねえのいいわけしてやがる。

仕事というより、奥さんのストレスだろが。

権三の妻、花子は気さくで優しいが、亭主にだけはやたらと厳しいのだ。

店を抜け出してサッカーをやらせて貰つてゐるわけだから、そうなるのも仕方ないのかも知れない。うちの愛子なんか、まだ優しい方だ。

とはいえやつぱり……集まりが悪いよなあ。恭太は、改めてそう思つ。

試合の日には出てやつてんだからいいだろ。あからさまにそんな考えを持つてゐる者はいないうだろが、そんな雰囲気が少なからずあるのは間違ひない。みな、サッカーが好きだから続けてはいるもの、他のことや、仕事も大切なのだ。

サッカーで飯を食つてゐるわけではない、という立場身分を考えれば当然の考え方ともいえるが。

恭太は比較的練習に参加してゐる方だが、それはたまたま他の者よりも時間が作れるというだけの話だ。それなりに熱心であるのか、他に趣味がないから惰性で続けていられるだけなのか、それは自分でも分からぬ。

好きといえば好きだし、辞める理由もないし、と、とりあえず続けてはいるものの、冷静に考えるところしたピリツとしている環境だとちょっとむなしいような気もしてくる。例えば、負けてあげ

るよと最初からいつている相手とポーカーをやつているよつな。

現在一月下旬。あと数日で暦の上では春を迎えるといつても、これは北海道、実際に周囲はまだまだ雪におおわれており、非常に寒い。

このグラウンドも、練習のために雪掻きした数メートルの円形以外は、完全に真っ白。白ウサギの似合つ雪原である。

その雪原では先ほどから、ウサギではなく人間の子供達が遊んでいるのだが、いつの間にか、その中にひとり大人が混じっている。

恭太は気付いた。

先ほど、宿屋せりざわに姿を見せた、あの外国人だ。

ひとり屈み腰でなにか作業している。

どうやら、かまくらを作りうとしているよつだ。

だが、積もっているのは粉雪、さらさらとしてそう簡単には固まつてくれない。悪戦苦闘している様子が遠目からでもよく分かる。

「無理だろ」

見ている権三が、ぼそりと呟いた。

外国人の男は、なおもかまくら作りを続けていたが、突然、わざかながら積み上げてきた作品を踏み付けて、早口で怒鳴り出した。

「ポルトガル語っぽいね」

「なんていつたんだろ」

長岡巧と木場芳樹が話している。何故かは分からないが、みんなあの外国人に注目しているようだ。まあ、子供の中にいて目立つといふことだらうが。

「なぜ雪くつつかないですか！　じゃねえの？」

恭太。

「こんなやわな家に暮らせません！　じゃねえの？」

権三。

「なんだそりや」

「あの外人、さつき、うちにも来たんだよな」

権三の家、家庭料理店兼居酒屋である。

「的場さんいるかつて？」

「最終的にはね。最初は黙つてモツ食べてたんだけど。途中で自家製プリンも頼んでたけど。別のテーブルで、うちの常連客が、キン肉マン知ってるかなんて話してて、歌の話になつて、なんか違つてる気がするけどどこが違うんだろ、なんてやつてたら、それはなんとかデース、つて割り込んできて、そいつらと溶け込んでしまつてさ。おれよく分からぬけど、まあ詳しそうに楽しそうに話してたよ。そのあと突然、おれのほうに近寄ってきて、的場さん知つてますか、つて」

「なんて答えた？」

「誰こいつ、つて思つたし、的場さん死んだなんていいたくなかつたんだよな。だから、『知つてるけど、遠いところに行ちやつた、もう帰つて来ないよ』、つていつてやつた。『オー』、つて片膝ついてがつくり来てたよ」

「じゃ、その後におれんこに来たんだな」

かまくら作りを諦めた外国人の男は、今度は子供達の輪に入つてなにやら話をしている。

子供たちは、誰かの持つてきたサッカーボールを蹴り始めた。

外国人の男も、中に混じり、奇声を上げて走り回つている。

「無邪気なもんだな。ちょっと本人から直接聞いてくるか」

恭太は歩き出した。

的場さんのなんなのか。それをただすために。
何者なんだ、あいつは。

芹沢恭太は、まだ深く残つてゐる雪に足を突つ込み突つ込み、子供たちの方へと歩いていく。正確には、子供たちの中に混じつてゐる、外国人の男の方へだ。

男、そして子供たちはそんなことまったく気付かず、自分らで雪を搔き分けた中でボールを蹴つて遊んでいる。

その時である。子供たちが蹴り損ねたボールが、高く上がり、恭太の方へと飛んできたのは。

恭太は一步進み胸トラップしようとしたが、完全に落下地点の目測を誤っていた。慌てて足を出しが、ボールは明後日の方に向に飛んで行ってしまった。

子供たちは、指を差して大笑い。外国人の男まで、両手を叩いておおはしゃぎだ。

「雪だらけなんだから、しうがねえだろ」

恭太は苦しい弁明をした。

飛んで行つたボールを取りに行く。危なかつた。川のほんの少し手前に落ちていた。ボールは弁償すればいいけど、川に落ちたら多分死ぬからな。たまに雪で埋もれて見えないことあるし。

「ちよつと、わたしたちとゲームしませんか？」

戻ってきた恭太に、外国人の男が声をかけた。

「ゲーム？」

男の日本語はしつかりしており、ゆっくり丁寧で、はつきり聞き取れたが、それでも恭太は聞き返した。発言の意味が分からなかつたからだ。

「ストリートファイター2をやろうってわけじゃありません。ファイナルファンタジーでもない」

「どんだけ日本のテレビゲーム通だよ。」

「それで」恭太の持つボールを指差した「あなたたちと、わたしたちとで試合をしましょう」

「子供とおっさんだろ。勝負になんないよ」

「わたしたちの不戦勝！ 勝利ですね！ うおおおおお！」

外国人の男は両腕を高く上げ、吠えた。

「外人、うるせえ！ ……じゃあ、あいつらに聞いてくるから」

恭太は雪原に足を突つ込み突つ込み、仲間たちの元へと戻つた。

「なに話してたんすか」

大道大道が尋ねた。

「試合やらないかつて聞かれた」

「あの子らと？ と、おっさんと？」

「うん」

「たまにはそういうのも、面白いんじゃないの？」

と、権二。

恭太は、子供たち、と、おっさんを手招きで呼んだ。
「やろうつてさ。人数似たようなもんだし、メンバー、いっちゃんにした方がよくない？」

「いえ、あなたたちバーサスわたしたち子供軍団で」
あんたは子供じゃないだろ。

「本気？ それ」

まあ、いいのか。遊びなんだし。気心知れた者同士でバスしたほうが楽しいか。勝ち負けなんか関係ないし。つて、こっちは勝つけどね。

人数の関係で、五対五でやることになった。子供たちの中にGK経験者がいないということでGKは置かず。「ゴールネット代わりに引いたラインの、サイドネットにあたる横内側からボールを通せばゴールというルールだ。

みんなで軽く雪を踏み固める。そうしないと、足を踏み出すたびに埋まつてしまつてとても走れないからだ。

本当は、翌日に凍つて滑らないように、スコップでしつかり雪を掻ければいいのだが、そんなことしている時間がない。もうすぐ日が暮れてしまい、ささやかなライトがあるとはいえ、子供たちが遊びには危険な時間になってしまつから。

即席の、小さな小さなコートに、スター・ティングメンバーが散らばつた。

恭太は外れた。後藤権二、大道大道、長岡巧、宇野井聰太、小笠原慎二の五人だ。

作戦は特にない。

ポジションも、特に決めていない。

あちらは四人の子供と、テレビゲームマニアと思われる外国人の五人。

子供たちは、小学高学年と思われるのが三人、一人は中学年のようだ。

「じゃ、試合開始！」

恭太は手を上げ、大きな声を出した。

長岡巧は後ろにボールを戻した。

それを受けた小笠原慎一。

その間に、前へと上がる大道大道。

小笠原慎一は、大道へとバスを出した。

しかし、それは繋がらなかつた。

走り込んできた外国人の男が、雪を上手に利用してスライディングしながらカットしたのだ。

器用に、滑りながら立ち上がつた。

大道大道がボールを奪おうと足を出す。しかしそれは、空気をついただけだつた。

ボールは、いつの間にか男の背後にあつた。素早く、足で裏に回したのだ。

「ちょっとはやんじやん」

大道は、二ツと歯を剥き出して粗野な笑みを浮かべた。

「どうも」

男は、大道に背を向けると味方つまり子供へとバスを出す。

「こつちへ！」

男は走りながら、少し前方を指差した。ちょっとだけイントネーションがおかしいが、咄嗟に出る言葉まで綺麗な日本語だ。

その指した場所へ、ボールが来た。

男がボールを受ける。

長岡巧と宇野井聰太の二人で挟み込んだが、男は隙間からするりと抜け出した。足には、文字通りにボールが吸い付いている。

男はまるで鼻歌でも歌っているかのように、楽しげな顔でドリブルで前進していく。

ゴールへ独走状態だ。

いや、駆け戻った権三が、男にスライディングをしかけていた。

足の間から、ボールを奪つた。

そう思つたのは、権三の脳内だけのことだった。

男は、跳躍していた。直前にちゃんと蹴つて浮かせていたボールと共に。

空中で、ボールを蹴つた。横へ。サイドネットの内側に当てるイメージで。

ライン上は、見事通過したが、

「ああ、今のはゴールじゃないね」

男のセルフジャッジ。

ボールを浮かせ過ぎた。本物のゴールがあつたならば、枠外であつただろう。

「でも、身体があたたまつてきましたよ」

男は、にんまりとした笑みを浮かべた。ここにいる誰よりも年長であろうが、だがここにいる誰よりも、子供のような、そんな笑顔であった。

後藤権三のゴールキックでリストート。

小笠原慎一がボールを受ける。

慎一に、子供の一人がプレスをかけてくる。

慎一は、ちゃんと横に蹴つて軽くかわす。そして次の瞬間、自分の足元にボールがないことに気付いた。外国人の男が、慎一の行動を読み、死角からボールを奪つたのだ。

あたたまつてきた。そう男はいつていたが、確かに、明らかに開始直後とは動きが違つていた。

まず、キープ力が抜群だ。一人では、とても奪えない。

そして神出鬼没。何故、ここにいるのか、というところに顔を出します。

ファジカルも屈強。激しくぶつかつても、いつも簡単に弾き飛ばされてしまう。

子供への指示が適確。

この男に対してもうしても一人掛かりにならざるを得ないものだから、一人余ることになる子が、男の指示の下うまく立ち回つて、とにかくバスが繋がる。

権三、大道、巧、聰太、慎一、みんな息があがつてきていた。相手にボールを回され、走らされているためだ。

だがしかし……

外国人の男のほうが、先にペースダウンした。

見るからに運動量が落ちてきていた。

腰も痛そうで、プレーの切れ間ごと、両手を当てて押さえている。

「まだまだデース」

自分を鼓舞している。ちょっと、外国人ぽいイントネーションが出てた。

子供軍団プラスワンは、この外国人が動けなくなつたことで、完全に劣勢になつた。

そしてついに、大道大道がゴールを決めた。

一分後、小笠原慎一が続いた。

巧、大道、大道、権三、大道、慎一、大道、巧、聰太、ゴールラツシユだ。

「はい、終了！」

時計を見ていた芹沢恭太が叫んだ。

終わつてみれば、大人チームの圧勝であつた。

みんな、へたばつていた。

十人の、大人、子供、外国人、敵味方が息も絶え絶えにピッチの外へと引き上げてくる。

大勝したというのに、大道や権三たちの表情に明るさは微塵も感じられなかつた。

不満、悔しさ、苛立ち、そんな表情であつた。

実際、彼らは敗北感に全身を包まれていた。それは、外から見ていた芹沢恭太と木場芳樹も同様であつた。

当然だ。相手は四十越えていると思われる中年と、小学生の子供

たちなのだから。

そして自分たちは、まがりなりにもリーグ入りを目指しているチームに所属するサッカー選手なのだから。

「あなた、もしかしてコーディじゃないか？」

木場芳樹が外国人の男に対して発した質問に、恭太は驚いた。恭太だけではない。権三も、聰太も、みな少なからず驚いているようであった。

この顔、そしてサッカーの上手さ、確かに、そうなのかも知れない。こんな性格だとは知らなかつたが。

コーディとは、世界的な知名度を誇る、元サッカー選手だ。

ブラジル代表に召集されたこともある。不運も重なつて試合に出場したことはないが。

木場にコーディではないかと問われたその外国人の男は、尻に沢山のシワを溜めてニコニコと笑つてているばかりであった。

3

家庭料理と酒の店「ふうりん」。

後藤権三の経営している店である。

路地裏の一角にあるが、集客力に関しては表通りの店とさして変わらない。一昔前と違つて観光客が激減しており、表通りにしても人通りは少なく、この辺りの店は常連客によつて支えられているからである。つまり、どれだけ悪い噂の立つことなく長くやってきた古い店であるが、集客はそこに大きく左右されるというわけだ。

権三の曾祖父が戦後に創業した店なのだが、このような店名になつた由来は権三も詳しくは知らない。

曾祖父の幼少期のあだ名がブーリンであつたとか、娘がプリンが好きであつたとか、不倫がどうとか。現在となつてはもう永久に分からぬだろう。分かつてているのは、店名からヒントを得て権三の妻がメニューに加えた手作りプリンが、なかなか好評ということだけである。

現在、夜である。

店内は、仕事を終えた中年男性で賑わっている。もちろん女性や、若い男性もいるが、空間のほとんどを占拠しているのがいわゆるオヤジと呼ばれる存在である。

ど真ん中にある大テーブルに、芹沢恭太たちイクシオンACの選手たちが座っている。

テーブルについているのは、練習帰りの芹沢恭太、大道大道、小笠原慎一、木場芳樹、長岡巧、仕事で都合がつかず練習には参加出来なかつたが、日野浩一と和歌^わ歌^{かおさむ}。練習に来ていた宇野井聰太は、仕事の都合で先に帰った。

後藤権三はこの店内にいるにはいるが、嫁にびしぶしと働かされていて、この輪に加わるどころではない。彼が店の主人であることを考えると、当然といえば当然であるが。

さて、このテーブルに、もう一人、いる。

外国人の男である。

彼は先ほど雪原で、木場芳樹に、コーディではないかと問われた。そして彼は、コーディであることを認めた。

的場耕平と、彼の率いるサッカーチームのために来たのだと。

雪原は寒いし、もう暗くなるし、暖かくて落ち着いて話せる場所を考えたが思いあたるところがなく、つるさこことを承知でこの店に来たのである。

宇野井聰太は「コーディと飲めないことを残念がっていたが、仕事なので仕方がない。

前述した通り、コーディは有名なブラジル人サッカー選手である。本名はとても長いのだが、登録名である「コーディ」があまりに有名過ぎて、誰もうる覚え程度にも覚えていない。ケイゼンジエウランドなんとかボニールなんとかかんとか寿限無寿限無。

何度も代表に召集されたものの、その都度、合宿などで怪我をしてしまい、代表戦に出場したことが一度もないという不運の選手であつた。ただ、国内のリーグでその実力は折り紙つきであつた。

ドリブルやショートといった個人技もあることながら、特に戦術眼に優れていた。

戦術理解度の非常に高い選手であった。

若い頃は所属チームでも、監督から相当に鬱陶しがられていたらしい。練習中でも試合中でも、戦術について口出しをするからだ。

「的場さんは、どんな関係だったの？」

芹沢恭太は尋ねた。一番、大切なところである。

宿屋で初めて会った時には敬語を使ってしまったが、客ではないことが分かったので、すっかりぞんざいな口調だ。

コーデは問い合わせに答えた。

的場耕平とは、もう三十年近くも昔、お互に貧しかった頃から知り合いだ。

自分の働いていた農園の、隣の農園の持ち主が的場であったのだ。知り合って間もなく意気投合し、暇さえあればサッカーの話ばかりしていた。

「知り合いがいるから、とクラブを紹介してくれたのがマトバさんです。また、そこまでの旅費などの費用を出してくれたのもマトバさんです」

それは、間違いない的場さんだな。恭太は思った。

祖父の持つ農園を手伝いにブラジルに渡った彼であるが、数年と経たないうちに祖父が死去してしまった。すぐに農園を売り飛ばしてしまったことも出来たのだろうが、このままでは引き継いだ者が、そこで働く者が大変である、と、素晴らしい農園を作り上げ、そこで初めて地元の人間に譲り渡して帰国したらしい。

的場自身が誇らしげに語ったわけではないが、聞いた話を総合すると、そういうことだ。

「マトバさんは、地元北海道でサッカーチームの監督をやっていたといつてました。おじいちゃんの農園のためにわたしたちの国に来ることになったものの、戻つたらまたそのチームに戻る予定だと、いつたのです。日本では、プロサッカーリーグを作ろうという動

きがあり、自分のチームを将来は加盟させたい。それが自分の夢である。そんなことをいつていきました

「そう。恭太が入った頃にはもう道東プロックリーグに落ちていたが、以前はＪＦＬの一歩手前で、しかもＪ準加盟の承認を受けたチームだつたのだ。

その後、チームは降格し、また、お金もなく、色々な設備を次々手放すことになり、準加盟の資格は失われてしまつたのだが。

「お世話になつた人の夢、いつか協力しよう。わたしは思つてしました。彼のことを、片時だつて忘れたことはなかつた。日本語が喋れた方がお手伝いだつてはかどります。だから現役の頃だつて、毎日、コツコツと日本語の勉強をしていました。キン肉マンのビデオを、字幕の出るところを隠して何回も何回も見ました。それと科学忍者隊ガッチャマンと人造人間キカイダー。キカイダーはかなり面白い。傑作です。漫画版も持つています」

「それで日本にやつってきたつてわけか」

「話が脱線しかけたので、恭太はそれとなく戻してやつた。

「コーディは咳ばらいすると、続けた。

「わたしは現役引退した後、コーチ、そして監督のライセンスを取得し、さらにさらに日本語を勉強して、日本のこと勉強して、そして、この日本にやつて來たのです」

「監督になるために來た、つてこと？」

「食器を抱えて歩きながら、後藤権三が聞いた。働きながらも、ちよこちよこと聞き耳を立てているのだ。

「そうです」

現在の監督は日野浩一。選手と兼任である。

「おれ反対」

和歌収が頬杖ついたまま、右手を上げた。

「あなたは今日練習に來ていない。発言する資格はない」

「コーディは立ち上がつた。文句があるなら辞めろ、といわんばかりの表情で。

「プロジェクトじゃないんだ。みんな仕事持つて、どうしても離れられない
かつたりもする。合間をぬつて、練習しているんだから」

恭太はなだめた。

「それは分かりますが」

「コーディの気持ちは分かる。恭太も、同じような気持ちになる」と
があるからだ。

自分だつてたまに、仕事で練習に来ないくせに。
雪の日などにたまたま仕事が忙しくて行かれないと、ちょっとほ
つとしたりしているくせに。

4

「いい湯でした」

「コーディは浴衣姿に、タライを抱え、頭には手ぬぐいを載せている。
よくそんないい回しを知っているな、と芹沢恭太は思つたが口には出さなかつた。また延々とキン肉マンやガッチャマンの魅力を語
られても困るからだ。

ここは宿屋せりざわ。恭太の経営している旅館である。

「コーディは今日来日したばかりで、宿も決めていないこととで、
とりあえずここに泊まつて貰うこととしたのだ。

無料でいいというのに頑として聞かず、宿代を受け取つた。

「ああ、それ見てた見てた。小学生の頃。懐かしいなあ」
従業員の石館じづえがコーディと楽しそうに話している。

「おお、そうですか。わたしは特にバツファローマンが好きでして
ねえ。ヒールな、ミートの身体をバラバラにしちやつた頃の
結局、ここでも出るのか、その話……
次いでコーディは厨房へ遊びに行つた。

料理人の片石亨が後片付けをしているのを、強引に手伝わせて貰
つている。

日本のこと、北海道のことをしきりに尋ねるコーディ。

片石も、相手は宿泊客だからということ関係なく、気さくに応じ

ている。

「ではみなさん、お休みなさい」
やがてコーディは、自分の部屋へと戻つて行つた。

「なんか、変わつた人だねえ」

芹沢愛子が、旦那にいつた。

「そうだな」

「日本語喋る外国人つて、それだけでなんか面白い感じに思えるけど、日本語じゃなくたつて面白いんだろうねえ。多分」

恭太はフロントに行くと、受話器を取り、電話をかけた。

もう夜の十時半。

でも、多分いるだろ？

呼び出し音が五回ほど鳴り、そして彼は出た。

「ああ、シマさん？ お疲れ様。あのさあ……いやいや、まあ、そ
うなんだけど。ちょっと違う用でああ。日野から連絡行つてない？
そつか。まあ聞いてよ」

電話の相手は、田島雄一たじまゆうじといつ名前で、スポーツクラブイクシオンの社員。要するに、芹沢恭太の所属するサッカーチームであるイクシオンACの、人事や庶務などを担当している者である。

イクシオンACがJリーグ準加盟だった頃は、スポーツクラブを母体とする地域密着のチームを作りうとこうことで、積極的に投資し、積極的に運営に関わつていた。

だが、長引く不況により実質的に運営撤退。

さらに、チームが降格したことで、現在では単なる胸マークのメインスポンサー程度の存在になつていて。チームの存続を考えれば、それでも充分に有難いのだが。

運営から撤退といつても、色々と名前は残されており、スタッフもその社員ばかりなのである。

チーム作りに全く参加してこないくせに、何かをするには彼らの許可が必要なのである。

恭太が電話をかけた理由というのは、コーディのことだ。

選手兼任監督の日野浩一は、試合人事以外の全てを面倒臭がつて、おそらく連絡していないだろうと思つたが案の定。自分が連絡する義理でもないかな、とも思つたが、現在なんだか自分が一番コーディと深い仲になっているのではないかと思い、親切心から連絡してみたのだ。

話した内容としては、たいしたことはない。

監督希望者が現れた。その事実を報告しただけである。

また、チームに反対論者もいるということを。

5

H市営臨海陸上競技場。

H市の海沿いに建てられた、かなり大きなスタジアムだ。収容人数22000人。芝生席などはなく、全て、座席である。周辺地域の住民数やスポーツ人口などを考えると、無駄に大きい規模といえる。

ごく例外的には、座席が埋まることがあるのだが、ほとんどの場合、ガラガラだ。

今日も果たして通常通り。これから試合だというのに、百人も観客がない。

陸上トラックに囲まれた、芝のフィールド。その中には、これら試合を行う選手たちがいる。

片や、色のついたユニフォームで、

片や、上下とも白だ。

みな、サッカーボールを蹴っている。

そう、これからここで行なわれるのはサッカーの試合である。

現在、試合前のウォーミングアップ途中だ。

「次！」

宇野井聰太郎の合図に、芹沢恭太はボールにゅっくり駆け寄り、蹴った。

ボールは木場芳樹の手をすり抜けるように、ゴールネットに突き

刺さつた。

「次！」

大道大道がボールを蹴る。

打ち上げてしまい、クロスバーの上を越えていった。

恭太たち側の着ているのは、ワインレッドのシャツにダークブルーのパンツ。

イクシオンACのユニフォームだ。

今日は、道東ブロックリーグの開幕戦。イクシオンACが、ホームでハ蘇地信銀を迎える。

イクシオンACのホーム開催時に、使う競技場は二つある。

一つはこの、H市営臨海陸上競技場。

それともう一つが、波瀬ヶ丘ひのぼり陸上競技場。

選手たちにとつては、どちらもホームといつ実感はさほどない。

応援団はどちらも同じような数だし、同じスタジアムを、相手がホームとして使うこともあるし。

今回のように相手がセカンドユニフォームを着ていることで、他人事程度に実感が湧くくらいのものだ。

フィールドと客席とをぐるりと隔てる壁に、選手を鼓舞する様々な横断幕が張られている。

閃光のドリブラー D A I D O !

粘れ！ ゴン

等など。

女性マネージャの三宅梓が、両腕にたくさんボトルを抱えて歩いている。タッチライン上に、一本づつボトルを置いていく。場内スピーカーより、男性の声が聞こえてきた。ガリガリとノイズの混じる酷い音質で、選手紹介が始まった。

まずはアウエイ、ハ蘇地信銀から。

選手名が読み上げられる度、太鼓の音に合わせて、ゴール裏のサポーターたちが「オイ！」と叫ぶ。

アウエイの洗礼なのか、アナウンスのテンションが異様に低い。

単に読み上げているだけだ。

続いてホーム、イクシオンACの選手紹介だ。

結局、こちらもまったく同様に、テンションが低かった。

「選手の方は、練習時間終了です。引き上げてください」

みな、アナウンスに従い、それぞれの控え室へと戻つていった。

イクシオンACの控え室。

小笠原慎一がドアを開けると、すでに男が一人。椅子に腰をかけている。

外国人。

年齢は四十分半ばであろう。目じりに皺は多いが、褐色の肌はまだ若い。座っているが、大柄であることが分かる。瘦せているように見えるが、服の中には筋肉がぎっしりと詰まっているのが一目で分かる。

もうお分かりであろうが、コーディである。

選手兼任監督である田野浩一が、コーディの横に立ち、口を開いた。ドスのきいた声で。

「みんなに、話したいことがある」

と、その時、またドアが開き、控え室に、おかっぱ頭の瘦せぎすな男が入ってきた。

年齢、四十少し前といったところだろうか。

イクシオンスポーツクラブの社員である田島雄一だ。

「わたしから話すよ」

そういうと、田島雄一は話し始めた。

「もう顔見知りになつていてるのもいるようだけど。彼はチーム設立の功労者である故人の場さんの知り合いらしい。名前はコーディ。本人から聞いたところでは、ブラジルでサッカー選手をやつていたそうだ」

「おい、シマさんひょつとして、コーディのこと知らねえのかよ」

後藤権三は小声で呟いた。しんとした部屋、誰にも聞こえているが、田島雄一はまったく気にした風もない。自分がサッカーを知つ

てこる必要性はないからだ。

「世界的にその名を知られている『ページ』であるが、彼自信もまつたく気になった様子もなく、椅子に座つたままにやにやと楽しげな笑みを浮かべている。

田島雄一は続ける。

「監督になりたいとのことだ。わたしとしては、特に異論はない。いまでも素人が監督なのだし」

田野浩一をちらりと見る。

「資格はちゃんと持つてんだよ」

田野は面白くないそうに、血らの角刈り頭を両手で叩いてくる。

「ページを指さして、

「あんたさあ、選手としては超一流だったって知ってるけど、監督経験ないんだろ。それに、ブラジルと日本は違うぞ。しかもアマチュアだ。上の世界の理論なんか通じねえんだよ」

「とまあこんな風に、満場一致で新監督を、つてわけにはいかないと思つので、そこで提案なんだが、今日の試合の采配で様子を見ることにしよう。もちろん、まだ彼はチームに登録されていないから、記録上は田野君が監督だけど。田野君、文句ないか？ 採点基準は、難しくは考えず、去年のゲーム内容の記憶と比較して、より良いと感じるかどうか」

田島雄一は事務的に淡々とした口調でいった。

「バカ野郎。文句つづーか、監督つて普段の練習からチーム作つてくものなんだぞ。おれ、仕事で来られないことも多かつたけど、でも、そんないまいきなり来たような奴が、いきなり結果出せるはずないだろ。そんな甘い世界じゃあねえんだよ」

田野は怒鳴つた。

「おれ、賛成」

大道大道が、頬杖ついたまま、もう片方の手を上げた。

「そうそう。もしかしたら、劇的に良くなる、という可能性が、なへない。それが何パーセントかは分からぬけど」

長岡巧が続いた。

「去年は、慘憺たる成績だつたからねえ。からうじて残留だつたし」
小笠原慎一。本職はホテルの料理人だが、タコよりしへ田野を真つ赤に茹で上げてしまつた。

「ぶつ殺すぞお前ら！ ふざけたことばかりいいやがつて。分かつたよ。お前、やってみるよ、監督をよ」

サッカー界の端くれに身を置きながら、世界的一流プレーヤーに対する尊敬もへつたくれもない田野であつた。まあ、端くれだからこそともいえるのだが。

「はー」

田野の言葉を受け、「コーディは立ち上がつた。

「監督代行をさせてもらつことになつたコーディです。よろしく。さきほじまでのウォーミングアップで、あなたたちの適正を見させてもらいました。もう申請してしまつたからスタメンは変えられないけど、ちょっとポジションいじらせてもらいますね」

コーディは流麗な日本語でそういうと、ホワイトボードに磁石を並べ、メモを見ながら名前を書いていく。

選手たちが驚いたのは、あまりに綺麗な漢字だつたといつせいではなく、もつと別のところにあつた。

「ええ、おれがFWやるの？」

ドレシドヘアだが気の弱そうな（実際に弱い）大城政。入団して四年、去年までずっと、左SBをやつていた選手である。

「にゃんだとおー、おれ、ボランチかよー！」

田野浩一。もともと右SHの選手だ。監督兼任であつたので、勝手にそこを適正と思つてやり続けていただけだが。

「おじおい、今日の相手は去年一位だぞ。参入戦で、退場などで運悪く負けてまだブロックにいるけど、JFLに田指しての強豪だぞ。ポジションには適正以外に慣れつてもんもあるんだし、とにかくいじりやいいつてもんじやないだろ。テレビゲームじゃあねえんだよ。これじや勝てつこねえよ。試合数の少ないリーグだから一試合の重

みがでけえのに、さつそく負け決定かよ

日野はすっかりお手上げの仕草。

「今までいわれても、コーディの表情に変化はない。

口元にはずっとおだやかな笑みが浮かんでいる。

小皺に埋もれた小さい目は、なんだか無邪気な少年のように輝いている。

「戦術は、とりあえず細かいこといいません。基本に忠実にやって下さい。GKは油断しない。大きくコーチング。DFはしつかり守る。SBは機を見てのオーバーラップ。ボランチは攻守のバランスしつかり取つて。日野君の方がちょっと守備的にした方がいいかな。FWを含む前田のポジションはどんどん攻める。戦術以上に、なによりも基本に忠実にして欲しいのは、楽しくやりましょう、ということ。それだけです」

「コーディは締めくくつた。

選手たちそれぞれの脳裏には、様々な思いが飛来していた。

単純にいって、期待と不安、そして興味だ。

日野浩一のように、怒りのみの者もいるが。

開始十分前。

選手たちは、控え室を出た。

対戦相手である八蘇地信銀の選手たちの姿が見えた。

これから、ピッチへの入場である。

両チームの選手たちは肩を並べ、一列になつた。

後藤権三は、隣の選手を横目でちらりと見た。八蘇地信銀のFW、森真吾だ

「この野郎……去年こいつにつっかけられて、おれ、足を捻挫したんだよな。審判の野郎見てねえから、そのまま持ち込まれて、ゴール決められちまうし。今回はぜってえぶつ潰すかんな。おれはもとからCQBだから、コーディの奇天烈采配にも混乱はねえし。

「ぶつ潰す！」

野太いガラガラ声で叫んだ。

周囲の選手たちはびっくりし、たじろいだ。

「うるさいよ、ゴン」

芹沢恭太だけが冷静だ。

「それでは、両チーム、選手の入場です」

場内に、バリバリと割れた、質の悪い音声が響いた。

まったく抑揚がない喋り方。DJというより、本当に単なる場内アナウンスだ。いや、それ以下かも知れない。

「まあ、やるだけやろうぜ。最悪、入れ替え戦に勝ちやいいんだから」

と、恭太がのんびりした口調でいう。

「入れ替え戦なんかすることになつたら、みんなでおめえんとこのおんぼろ旅館押しかけて重みでぶつ潰すぞ。つうか、そんなことはならねえんだよ。今日の結果はどうなるか分かんねえけど、次からまたおれが監督に戻るんだから」

「分かつた分かつた」

薄暗い通路を抜けると、晴れ渡る青い空。

両ゴール裏に陣取つたサポーターの声援を受け、彼らはピッチへと足を踏み入れていく。

さつきまでここで練習していたといつのに、こうして改めてユニフォームを着て、ピッチへと入ると気が引き締まる。例え応援してくれる人が数十人しかいなかろうと。

一人、また一人とピッチへ入つていく。

大道 大道	FW
秋沼 重臣	MF
長岡 巧	MF
大城 政	FW
日野 浩一	MF
芹沢 恭太	MF
小笠原 慎一	DF
滝本 孝	DF

後藤権三 D F

橋本英樹 D F

木場芳樹 G K

これが、イクシオンACのスター・ティングメンバーである。このポジション表記は届けた登録上のものではなく、先ほどローディが決めたものだ。

なお、リザーブメンバーは

F W 野木基の き
M F 和歌収

D F 村山伴、宇野井聰太郎

G K 吉田健一

この五人。

両チーム、選手たちがピッチ上に散らばった。サポーターの声援。太鼓の音が響く。

選手たちはあらためて集まると、肩を組み合い、円陣を作った。「慣れないポジションだろうと新米監督だろうと、試合が始まれば関係ねえ。死ぬ気でいくぞ。勝つぞ！」

日野浩一は間近に揃つたみんなの顔に手をやると、そう叫んだ。

「おう！」

北の大地、広がる青い空の下、声が響いた。

6

芹沢恭太はドリブルでライン際を駆け上がった。ゴール前へと、大道大道が走つていくのが見える。恭太は、相手DFをフェイントでかわした。ここで、クロスだ。

しかし、せつかく自由な状態であつたといつに、慣れておらず焦つてしまつたためか、目茶苦茶な方向へボールを蹴つてしまつた。アーリーカrossを上げるべきところだが、アーリーどころか少し

も角度を変えることが出来ず、真っ直ぐ「ゴールラインへと蹴り出してしまったのだ。

「キヨンさん！ ドンマイドンマイ！」

大道が、意味不明な大袈裟なゼスチャー、馬鹿でかい声を張り上げて恭太を励ましている。

励まされたところで、もともと氣落ちなんかしていない。クロスを上げることなんか、慣れていないからだ。

ハ蘇地信銀のGK、棚田裕也のゴールキック。

助走を付け、蹴った。

ハーフラインを越え、一気にイクシオンACの最終ラインにまで飛んだ。

競り合つ後藤権三と、ハ蘇地信銀のFW森真吾。

権三の方が十センチ近く背が高い。

良い位置を占めたのは森真吾であつたが、権三は身長差を活かして、軽く跳躍すると頭で跳ね返した。

去年は、このFWに怪我させられるわ、審判がラフプレーを見逃したおかげで失点してしまったわ、散々な目にあつた権三であるが、現在のところミスすることなく冷静に、しっかりと守ることが出来ている。

こぼれたボールを、ボランチの日野浩一が拾つた。

詰め寄られる前に、長岡へとバスだ。

日野はいま、なんと表現していいのか分からぬ氣分を味わつていた。

おそらく、自分だけではない。

この、くすぐつたいような気持ち。

長岡は、MFの松木安一郎をかわすとクロスを上げる。

いや、松木のかろいじて伸ばした足に邪魔され、ボールを空高く打ち上げてしまった。

ボランチの秋沼重臣しげおみとハ蘇地信銀の小柴潤一郎が、落下地点を指して走る。

秋沼が一步早かつた。

前線へ、大きく蹴つた。

雄叫びを上げながら、大道大道が走る。

ボールの落下地点へ。

DFの茂木勝もきまさると、競争になつた。

大道大道が先に追いつきそうだ。

GKの棚田裕也たなだゆうやが飛び出してきた。そして、身体を横に倒しながら、滑つた。

大道は、背後からの足音に反応し、ボールを真横へと転がしていた。

やはり、走りこんでいたのは大城政であつた。

右足を振りぬいた。大城のトレードマークであるドレッドヘアが、ぶうわと持ち上がつた。

宇宙開発。ラグビーの「ホールキック」のような角度で、クロスバーの遙か上空を飛んでいつてしまつた。

「ああもう、決めるよマサ！……でもまあ、走りこんでくるタイミング、すげーよかつた。ひょつとして向いてんじやん、そのポジション」

大道の口調は荒っぽく、文句をいつているのか褒めているのか分からぬ。

後ろから、いまのシユートに到るまでの一連の流れを見ていた田野浩一は、身体が震えていた。

先ほどから感じていた、むず痒いものの正体が分かつてきたのだ。これが、監督の力量つてやつなのか。

ベンチで腕を組んで座つてているコーチを見る。

でも、ポジションいじつただけで、それだけで、なんもしていないよな。あいつ。

でも……

パス、回せてる。

奪えてる。

決定機も作れてる。

去年、ドン引きでやるのに精一杯でなにも出来なかつた相手に、元だ。

向こうさん、選手ほとんど去年のままだぞ。

オフの間に、うちらの個人技がそれほど上がつたつてのか？
そんなはずないだろ。

仕事をいいわけに、みんなだらだらやつてたんだから。
じゃあ、やつぱり……

この感覚、おれだけじやないよな。

おれだけじや。

ほら、みんなの顔。
手じたえ掴みかけていることに、驚いている。

もつと試したいと思つてこいる。

そんな顔、してやがる。

どいつもこいつも。

少なくとも、負けるかも知れないなんて、これっぽっちも思つて
いない顔だ。
誰だよ、こんなんじやちぐはぐになつてボロ負けするなんていつ
てた奴は。

「やつぞ！」おらああ！
「やつぞ！」おらああ！

田野浩一は、まるで熊のような雄叫びを上げた。

「サッカーは小学生の頃から一十年以上やつてんだ。ボランチなん
て知りませーんなんてガキみたいなことこつてる暇はねえんだよ、
この野郎！」

「誰に叫んでんだよ、バカ！」

芹沢恭太が冷静に突っ込みを入れる。恭太自身も、他の者同様に
かなりハイになつてているのだが、田野浩一と比べると落ち着いて見
えてしまうだけだ。

「自分だよ！」

一人は顔を見合せると、どちらからともなく一ヶと笑つた。

八蘇地信銀、棚田裕也のゴールキック。

風に乗り、遠くまで飛んだ。

CBの橋本英樹は、迫つてくる相手FWにちらりと視線をやると、落ち着いてヘディングで日野浩一へと繋いだ。

日野から、さらに頭で恭太へ。

恭太は足で、丁寧に受けた。

八蘇地信銀の松木安一郎が立ち塞がった。

恭太は、抜く素振りを見せ、ボールを横に転がした。駆け上がつてきていた右SBの小笠原慎一が拾い、速度を落とさずドリブルに入った。オーバーラップだ。

左サイドのFWやMFが上がつているのを確認すると、小笠原はゴールライン遠目から、いわゆるアーリークロスを上げた。だが精度悪く、相手ボランチに拾われてしまった。

イクシオンACの選手は、かなり人数を割いて攻め上がつていた。となれば、ボールを奪つた八蘇地信銀としては取るべき手段は一つ。

カウンターだ。

ほとんどの選手が一斉に、さながら津波のような勢いで駆け上がつていく。

イクシオンACで残つているのは、GK以外はCBの後藤権三と橋本英樹の二人だけだった。

津波に飲み込まれそうになる焦りから、権三に、ラインコントロールのミスが出た。

八蘇地信銀、小柴潤一郎から前線へのグラウンダーのパス。オフサイドぎりぎりのタイミングで飛び出した森真吾へと渡つた。権三たちは完全に遅れていた。

森真吾は芝の海を独走する。

GK木場芳樹と一対一になつた。

勢いを抑えてコースを狙つた、森真吾のシュート。完全に枠を捉えている。

木場は横つ飛びで、かろうじて手の先に当たった。

ボールは「ゴールラインを割り、八蘇地信銀にCKが与えられた。

「ナイスプレー、ファン

橋本英樹が手を叩いた。

ファングというのは木場のニックネームである。木場 牙、といふことらしい。

イクシオンACのゴール前に、両チームの選手たちが集まり、ひしめき合つた。

キッカーは、MFの松木安一郎だ。

審判の笛が鳴つた。

短く助走し、蹴つた。

ボールは大きな山を描いて、ファーへと飛んだ。

八蘇地信銀のDF茂木勝が、後藤権三と空中戦を競り合い、競り勝ち、ボールを折り返した。木場の手のうえを、通り越していく。ゴール前中央で、マークをかわしてするりと抜け出した森真吾が、頭を上手く合わせた。

木場はゴールネットが揺れるのを、黙つて見ていることしか出来なかつた。

森真吾の、ゴールが決まり、八蘇地信銀が先制した。

ドンドンドンドンドン。

太鼓の音、そして観客席からはまばらな拍手。

地面を踏みつけ、悔しがる権三。

セットプレー時のマークは担当ではないが、奴に決められたことが腹立たしい。

腹立たしくはあるが、先制されたことへの焦りはない。

去年ギリギリ残留したチームである、失点などは悪友のようなものだからだ。

権三だけではない。チームの誰もが、気落ちすることなく、動きの質の落ちることもなく、攻め続け、そして、守り続けた。長い笛が鳴つた。

前半戦終了。

ハーフタイムだ。

引き上げてくる選手たちを、コーディが出迎えた。

口元には、笑みが浮かんでいる。

「楽しそうだな」

日野浩一は、あえてぶっきらぼうな表情を浮かべた。

「はい。ここまでどうだったのか、それは知りませんが、あなたたちが楽しそうにプレーしているのを見て、ワクワクした気持ちでボールを蹴っているのを見て、わたしもとっても楽しいのです」「邪氣のない、実に清々しい顔。

確かに、今までにないワクワク感があつた。芹沢恭太は思った。恭太だけではない。先ほどまでピッチを駆け巡っていた選手たちは、改めて前半戦の内容、自分達のプレーを回想していた。

強豪であるハ蘇地信銀相手に最小点差である一点ビハインドでの折り返し、それは去年にだつてあつた（後半にボコボコにされてしまったが）。しかし現在、その時に感じたものとは比較にならないくらいに、選手たちの気分は高揚していた。

「頼む！ どうすれば、おれたちは勝てる。具体的な戦術の指示を聞かせてくれ！ お願いだ」

日野浩一が怒ったような顔で、怒っているような大声で、深く頭を下げた。

「では、話しましょう。みんなで、勝利を掴みましょう。ジークジオン」

最後の一言は意味不明だが、とにかくコーディは優しい笑みを浮かべると、踵をかえし、ゆっくりと控え室の方へと歩き出した。

控え室には女子マネージャーの三宅梓がいて、選手たちにタオルを渡してくれた。

コーディはホワイトボードに向かうと、マーカーを手に取った。

ホワイトボードには、選手を示すのに使う赤い磁石と青い磁石が沢山張り付いている。コーディは磁石を動かしてはマーカーで矢印を

書き、戦術について丁寧に説明をしていく。

特に奇抜なことは、なにもいっていない。

選手たちは、小学生くらいからずっとサッカーをやってきているが、そうした中でいくらでも聞いたことがある一般的な戦術論であった。

ポジションを変えただけで起こった前半戦の魔術、これがなければ聞く耳を持たない者もいたかも知れない。

だがいま、ここにいる選手たちはみな、真剣であった。

強くなりたい。

負けたくない。

勝ちたい。

大物を食いたい。

誰もが当然に思う欲求。

だが、かなえるには才能が必要だし、欲求に見合う努力も必要だ。

他にかける時間をほとんど投げ出さなくてはならない。

これまで、それをやつてきたといえるか。

やつていない。

努力して、全てを投げ出すことで、要求がかなう保障がないからだ。

高校、大学と、若い頃はガムシャラに頑張つてきた。

だから、こうしたリーダーを目指すチームから声がかかり、入れたのだろうし。

だが現在は、自分で働いて、金を稼がなければ生きていけない。家族のいる者も多い。

すべてを投げ出すという、バクチが出来ない。

サッカーは好きだが、全てを投げ打つてのめり込むわけにいかないジレンマ。

そう。サッカーが嫌いなわけではない。

大好きだ。

だから、勝ちたい。

勝てない。

勝ちに飢えている。

そして、いまここに、勝つチャンスがある。

勝つチャンスが……

「以上です」

コーディは、マークーを置いた。

もうすぐに、ハーフタイム終了だ。

「勝つぞ！」

日野浩一は叫んだ。

控え室の出口の壁を、通り様に思い切り叩いていた。

続く後藤権三も、同様に壁を叩いた。

やんないといかんのかな、と芹沢恭太も叩いて、控え室を出た。

恭太の背後ではさらに、バン、バン、バン、と続していく。

外へ出ると、すでに八蘇地信銀の選手たちは円陣を組んでいるところだった。

遅れ、イクシオンACの選手たちも円陣を組んだ。

顔を寄せ合つた。

みんな、なんだか自信に満ちた表情。ぎゅっと、肩に力を込めた。

「逆転するぞ！」

日野浩一の叫びに、みんなが応えた。

選手たちは、ピッチ上に散らばつた。

イクシオンACは、ハーフタイムで選手が一人、入れ替わった。

OUT 滝本孝、秋沼重臣

IN 村山伴、和歌収

それぞれ同じポジションでの交替、和歌収はドイスボランチの左、村山伴は左SBに入つた。

前半にそれほど左が破られていたわけではない。

これが、コーディの考えたベストメンバーというだけのことだ。スターディングメンバーは、既に日野浩一選手兼任監督が決めて提出

してしまっていたので変えられなかつたからだ。

両チーム、エンドを変え、そして後半戦開始の笛が鳴つた。

八蘇地信銀のキックオフだ。

森真吾はボールを後ろに蹴つた。

そこへ、大道大道が全速力で突つ込んで行く。

それが功を奏したのか、小柴潤一郎はミスパスでタッチラインを割つてしまつ。

イクシオンACのスローライン、小笠原が投げた。

芹沢恭太が受ける。背後に松木安二郎が張り付いたが、恭太はターンしつつ、軽いフェイントで上手くかわした。

そのまま、ライン際を駆け上がる。

スピードに乗つたドリブル、恭太の一番の特徴だ。もう三十歳だが、中学生の頃は陸上部とかけもちしたほど俊足とスタミナ、まだ衰えてはいない。

八蘇地信銀のDF茂木勝とマッチアップ。

恭太は、サイド側を抜く振りをして、かわす。内側へと切り込んでいく。

前線へと、グラウンドナーのパスを送つた。

ボールは、相手のDFとDFとの間を上手くすり抜けた。

オフサイドラインぎりぎりのところから、大道大道が飛び出していた。

ボールを受けた。

副審の旗は上がつていない。

そのまま全力疾走で、ゴールへと向かう。俊足、というほど俊足ではないが、とにかくガムシャラに走るのが大道の特徴だ。勢いがあるものだから、実際の速さ以上に速く感じられることがあり、相手DFから嫌がれることも多い。俊足というより快足だな、といわれたことがあるが、本人は全く意味は理解していない。もう一つ特徴を挙げるなら、ガムシャラすぎて後半途中から目に見えて運動量の落ちてしまうこと。まだ後半戦も始まつたばかりなので大丈夫

そうだが。

快足を見せる大道の前には、'ゴールがあるのみ。GKの棚田裕也がいるのみだ。

PA内に侵入した。

その瞬間、棚田裕也が飛び出してきた。ショートを全身でプロックしようと、身体を横に倒す。

大道は、それを冷静にかわすと、冷静にボールを流し込んでいた。そつと、'ゴールネット'が揺れた。

同点ゴール。大道は、右手を高く突き上げた。サポーターの叩く、激しい太鼓の音が響いた。

後半開始早々に追いついたイクシオンACであるが、それは、決して偶然ではなかつた。

その後も、主導権を握り続けたのである。

とにかくボールが回る。

味方を、ボールを、結果を信じて、走る。攻める。

取られても、すぐに奪い返す。

八蘇地信銀はすっかり防戦一方になつていた。

「去年と変わつてねえつてのに」

八蘇地信銀のDF茂木勝が、セットプレーで上がる際、日野浩一とすれ違う際に発した言葉である。

去年のリーグ戦では、八蘇地信銀が圧倒的大差での二戦二勝。お互いに選手がほとんど変わつていないというのに、圧倒出来ないどころかここまで押されるその不思議さ理不尽さ。

「ノッてつからに決まつてんだろ」

日野浩一が野太い笑みを浮かべた。

八蘇地信銀のCKは山なりでファーヘ。長身DFの茂木勝が待ち構えていたが、木場がなんとか手に当て、弾いた。

そのこぼれを松木安一郎に打ち込まれたが、バチンと凄まじい音で権三が顔面ブロック、'ゴール'は割らせない。

権三から気合の入ったボールを受けた日野浩一。駆け上がる。力 ウンターだ。

だが相手は守備にも人数を割いており、速攻を巧みに遅らせる。 なら普通に攻めりやいいんだ。どっちにしろうちが押してんだか ら。日野からボールを受けた芹沢恭太は、小柴潤一郎と勝負する素 振りをみせつつ、セオリー通りに駆け上がりってきたSBの小笠原に ヒールで渡した。小笠原はそのままオーバーラップ。恭太も全力で、 中央へ、ゴール前へと走っていく。

コーナーまで上がった小笠原は、松田俊介をかわすと、クロスを 上げた。

ボレーの大城と茂木勝が競り合う。

茂木の方が遙かに長身であるが、大城は巧みに身体を入れて、ボ ル落下地点を背中で死守。

と、身体を反転させ、飛んできたボールに合わせ、右足一閃ボレ ーシュート。

GKの棚田裕也が弾く。

そこへ飛び込んでいたのが芹沢恭太。ダイビングヘッド。ボ ルに、頭を叩きつけた。

GKはまつたく反応出来ていない。

決定的なシーンであつたが、結果としては虚しくバーを直撃した だけであつた。

こぼれたボールは、茂木勝が大きくクリアした。

それを拾つた和歌収は、前線の大城へと大きなバスを送つた。

胸トラップしたところ、相手の茂木勝と松田俊介とに囲まれ、奪 われそうになるが、フォローに入つた大城政にボールを預けて突破 に成功。

大道と大城、今日が初めてと思えない息の合つたツートップで、 ぐいぐいと八蘇地信銀の陣地を突き進んでいく。

ボランチの選手のスライディングを受け、大道は転ばされ、ボ ルを奪われてしまった。ファールをとつてもらえなかつたことに激

怒するが、すぐにプレーに戻る。

時間が経過していく。

もうそろそろ、後半ロスタイムだ。

芹沢恭太の足は、攣り始めていた。走り過ぎたのだ。

近くにいる日野浩一も、慣れないボランチで、守備に走らされたり、気分イケイケで無駄走りして攻めあがつたりで、やはり足が攣りかけているようだ。

勝ち慣れていないのだから、仕方がない。現在同点であり、勝ちでもなんでもないが、この押している状況に、イクシオンACの選手たちは、目前にぶら下がっている勝利という果実をあとはただ掴み取るだけと、そういう気持ちでいるのは間違いなかつた。

恭太は、振り返る。DFの後藤権三も、遠目からでも肩で息をしているのが分かる。あのバカ、タバコなんか吸つているからだ。

選手たちの疲労から、バスがかみ合わなくなつてきていた。

受け手が、走っているつもりでも、走っていないのだ。

時間の経過とともに、みな、走れなくなつてしていることを自覚してきた。

しかし気持ちは、誰一人として切れとはいなかつた。

勝てる。

そう信じて、走り続けた。

相手だつて辛いのだ。

だから実際、押し込んでいるじゃないか。

強豪相手に勝ち点1を取れればいいじゃないか。そう思つている者は誰一人いなかつた。

必ず、勝ち点3を取る。

今日は、勝てる。

おれたちは、やれる。

一点取ればいい。

それだけで、勝てるのだ。

「まだ走れつぞ、おれは！ うつらああ！」

田野浩一が獣のような声で叫んだ。

その叫びが終わるか終わらないかのうちであった。劣勢であった八蘇地信銀のカウンター、そして、森真吾がゴールを決めた。

サポーターの歓声、拍手、太鼓の音。

主審が、長い笛を鳴らした。

試合終了。

イクシオンACは、あと少しとこりひりで、勝ち点一も3も失つた。

芹沢恭太は、ふらふらと何歩か進むと、地面に腰を下ろし、そして仰向けに寝転がった。

大の字になつた。

晴れた青空を見上げた。白い雲を見上げた。すべてが、あの雲のように流れてしまった。でも……

勝てそうな、試合だった。

勝てた試合だった。

だけどあまり、いや全然、悔しくない。

奇妙な充足感、とでもいうのだろうか。そうしたもので、心も身体も一杯だ。

上体を起こした。

鏡がないので自分の顔は分からぬが、もし想像通りなら、田野や、大道らと、同じ顔をしているのだろう。

恭太は、ゆっくりと立ち上がった。

みな、中央に集まると、列を作り、お互いに相手チームと握手をかわした。

八蘇地信銀の選手たちが引き上げた後も、恭太らはまだピッチの上にいた。

この芝の感触をもう少し味わつてみたい。

ただ、それだけであった。

みんなで、同じ絵を描くことが出来た、芝という、このキャンバ

スの上で。

「お前らのさ、ツートップ、結構しつくりきてたじやねえか」

日野浩一が、大道大道と大城政の二人の裾を掴んで引き寄せ、二人の背中を思い切り叩いた。日野は睨んでいるような目つきだが、その口元には笑みが浮かんでいる。

「そうすか。大道大城、大大つてことで、オレンジツートップって呼んでいいですよ」

すっかり得意になつている大道。なんどもチャンスを作つたあの気持ちよさが、まだ抜けていない。まだ自信たつぱりな精神状態なのだ。

「センスねえよ、バカ」

日野は、大道の頭にぐりぐりと「げんこ」を押し付けた。

「いてて！ 禿げる！ 禿げる！」

もがく大道。

「みんな、お疲れさまあ」

男ばかりの汗臭い雰囲気に似合わぬ甲高い声が響いた。

マネージャの三宅梓が、タオルを抱えて近づいてくる。コーディ監督代行と、田島雄二も一緒だ。

「それで、どうでしたか？ わたしにサッカーは分かりません。みなさんで決めてください」

田島雄二の粘液質な声。チーム母体の社員とは思えない台詞。なげやりなわけではなく、彼は彼なりに、このチームや選手たちに愛着があり、その裏返しであつた。

「シマさん。おれ、いいと思う」

日野は「コーディ」と歩み寄ると、両手を取りぎゅっと握つた。

「つうか、もうこの人しか考えらんねえ。おれなんかクソだクソ。根性だつたら誰にも負けねえけど、頭悪いからよ、だから、おれなんかに監督兼任させてたのが、そもそもおかしな話だつたつーんだよ」

「お前がシマさんに、監督やらせてくれつて、がんとして譲らなか

つたんだろうがよ」

後藤権三は、呆れ顔で日野のほつぺたを突付いた。

「えー、「ウイチちゃん覚えてなーい」

日野は、「リラのような顔を歪めて女子高生のような口調。不気味であった。

「じゃあ、決まりですかね。後で、必要書類を渡しますから。あ、あと、大事なこと伝えてませんでした。うちは完全アマチュア。いまのところ。だから、お給料は一切払えないから。職の斡旋はするけど。うちのスポーツクラブでもいいし」

田島雄二は、さらさらと事務的にいつてのけた。聞くものが聞けば震え上がりそうな、世界のコーディに對し実に恐れ多い態度なのだが、田島はサッカーにさして興味はないし、他人から彼は世界的有名な選手だといわれても、興味のない分野のことなので、さしたる感銘も受けなかつた。

「いりません。貯金は充分にあります。お給料のかわりに、わたしはこの日本で、このチームで、勝手に色々なものを貰つていきますから。お給料以上のものを持つていくつもりですが、文句はいわないでくださいね」

そういうと、コーディは柔らかく目を細めた。

「泥棒かよ。遮断機や信号の部品持つてつたりすんなよ」

後藤権三がぼそりと呟いた。

「わたし心のこといつてます！　日本人、言葉の裏を読める文化じゃないんですか！　貯金は充分にあるつていつてるじゃないですか！」

なにをいわれても温厚な態度を崩すことのなかつたコーディが、なにが引っかかったのかいきなり顔を真つ赤にして怒鳴り出した。しかし、すぐ我に返り、誤魔化すように咳払いをした。

「ではあらためまして。このチームの監督をやることになつたコーディです。練習、とても厳しいですよ。普段の仕事で練習に来られないのでしかたないですが、その時は自宅で出来るメニューをやって

貰いますし、帰宅が深夜だらうと走りこみはやつて貰います。みんなで、強くなりましょう」

「コーデはじめたつもりであつたが、全員、返事がばらばらであった。

「ぴしつとするのが苦手な連中ばかりなのだ。

「ちゃんとしろよ、おめーら！」

日野浩一が怒鳴る。

「お前だら、なにがウオオオイだよ。氣だるい返事しやがつて」
権三が、人差し指で思い切り脇腹を突付いた。

「コーデは相変わらずといつていゝ、いつもの笑みを浮かべている。少し違うとすれば、より田を細めているということだろうか。満足げ、とでもいえばいいだろうか。

選手たちの表情の奥にあるもの。その変化。
それが、コーデを満足させたものであつた。
すでに夕刻。

バックスタンドの向こうに、大きな太陽が沈みかけている。
芝生の上には、選手たちの影がどこまでも伸びていた。

今日も宿屋せつざわの朝は早い。

職種が職種、当然といえば当然ではあるが、まだ日の出る前だといつのに、もうみんなであくせくと狭い旅館を行つたり来たり賑やかに働いている。

「どうも、おはようございます、社長」

男性従業員の岩寺虹夫が、自分の頭髪のよつな、薄汚れて白黒混じつたモップを両手にせつせと廊下を掃除していくが、社長、つまり芹沢恭太に気付くと曲がりかけた腰を頑張つてぴんと伸ばし、声をかけた。

「あ、おはよう岩さん」

いきなりシャチョーなどと立派な呼ばれ方をされて、一瞬目が覚めかけた恭太であったが、威厳をとりつくろつとおくかどうかを迷つているうちに、すぐにまた眠たそうな表情に戻つてしまい、そのままもつたりよたよたと歩いていった。

壁に頭ぶつけた。

ほんのちょっとだけ眠気が覚めた。

前日に特殊なことがあつたわけでもなく、本日特殊なことがあるわけでもなく、この時間の恭太はいつもこんな、単に凄まじく寝起きが悪いだけである。

「阿比留さん、そこもう全部盛り付けちゃつていいから

「はーい」

厨房の前を通りかかると、料理人の片石亨と中居の阿比留真弓の声。宿泊客の朝食を作つてているのだ。阿比留さんは、皿を出したり盛つたりのお手伝いをしているようだ。

「おー、旦那さん、おはようございまーす」

裏口が開き、富居新平が入ってきた。

「ああ、おはよう。今日も『苦労さん』

恭太は眠たそうな顔をこすつた。でも、さうにほんのちょっとだけ眠気が覚めた。

富居新平はここからさほど遠くないとひたすら自分の和食料理店を構えている。彼の父親の始めた店で、興す前にこの旅館で二十年ほど働いていたという縁で、日によつて空いてゐる時間を利用して手伝いに来てくれるのだ。とはいつてもちゃんとした仕事の契約であり、お金も払つてゐる。

「あ、旦那さん、おはよう、じざこます」

中居の一人、石館じづえが、一階廊下のカーテンを開け終えて、

階段を下りてきた。

「突き当たりのカーテンレール、錆びと歪みでギシギシ引っ掛けちゃつて、寿命みたいですねえ。あつ、そういえば、すっかり春ですねつて思つたこと、通気孔のところで冬籠りしてたコウモリ、いつの間にかいなくなつちゃいましたよ。ちゃんと飛び立てたんですかね。まあ外に落ちてなかつたから大丈夫だつたんでしょうけど。そうそう、旦那さん、来週ねえ、うちの息子がねえ」

いつものことではあるが、まあ、ペラペラペラペラといつるさい。仕事上の話から始まつたはずなのに、恭太が一言たりとも返さないうちに、どうでもいい話に発展してしまつてゐる。

さすが今日の発言が明日には北海道全域に伝わつてゐると仲居仲間にからかわれてゐるだけある。

「石館さん、終つた？ それじゃ、また頼みたいことがあるんだけど」

女将さん、つまり恭太の妻である愛子がやつてきて、あれやこれやと指示を始めた。

「ああ、なるほどですね。分つかりしたあ」

と、石館じづえは跳ねるような足取りでまた一階へと戻つていつた。

「さてと、阿比留さんは厨房はもういいかな。部屋の掃除してもら

わないと。そうだ、恭ちゃん、あとで幸善屋にお布団取りに行つてきてよ、お昼まででいいから。それで、出来れば帰りに……恭ちゃん！ ぴしつとする、ぴしつと！ 旅館の『主人様が、そんな眠たそうな溶けたような顔して頭ふらふらさせてんじゃないの！ 朝早いつたつて、お密さんとすれ違うことだつてあるんだからね。とうか、働いてるみんなにも示しつかないのでしよう』

「ふああああい』

と欠伸を噛み殺そようと自分と格闘しながら、フロントに設置されたコンピュータのところへ向かい、椅子に座つた。

「今日は確かあ、団体さんが来るんだよな」
いま愛子に布団のことをいわれて思い出した。
ぎこちない頼りない手つきでキーボードを叩く。
どこからどんな客だつて。何名だつて。
あ……

「やべ、全部消えちまつた！」

画面に顧客データが表示されたかと思うと、突然文字が消え、真ん中に、登録無しの四文字がポップアップ。

「ここを選んで、こりうだよ。消えてない』

愛子はキーを二つ三つ叩くと、画面に再び顧客データが表示された。

「おつけえい』

安堵の溜息。GKナイスセーブ。

「おつけいじやないよ、いい加減覚えなよ

「そのうちにな』

何年か前までは、よくぞこんなものがこのインターネットの時代に、というようなグリーンモニターで操作する端末だつたのだ。ようやくにして覚えかけたというところで、祖母が、データセンターとやりとりするからうちにホストコンピュータはいらない、などとさっぱりわけの分からないとんちんかんちん一休さんなことをいい出して、ウインドウズの端末を新規導入したため、これまでの操作

経験やシステム理解の知識がリセットされてしまい、もつもつぱり分からず、覚える氣にもなれない。

「いい湯でした。ほんまにー」

外国人の男、「コーディがやつてきた。朝風呂を浴びていたのか浴衣姿で風呂桶を持つて、頭には手ぬぐいを乗せている。いまにもドリフの歌でも歌い出しそうな雰囲気だ。

「ピンボールはないんですか?」

「ないよ」

どこの山奥の温泉宿だよ。近所にストリップ劇場もねえぞ。
さて、一時間、一時間と時も過ぎた。

従業員にとつて毎日の仕事はほぼルーチンワークといえる決まりきつた流れ作業で、まあ色々と例外もあるものの、大半は愛子が指示を出すか自分でやつてしまつ。経理も先代女将、つまり恭太の祖母がやつている。なにがいいたいかといふと、つまり恭太の普段の仕事はそれほど多くはないということ。とりあえずここは主人として、責任者として、一通り形だけは仕事をしているうちに完全に目も覚めてきて、幸善屋から布団を取つて戻つて来ると、休憩時間と称してサッカーボールを手に中庭に出、リフティングを開始した。右の爪先、右の爪先、左の爪先、左腿、頭、胸を転がして左の爪先、右の爪先。

下駄で器用に蹴り上げる。

大道芸でやるようなブレイクダンスさながらのアクロバティックな真似などは到底出来ないが、この地味な調子で百回程度ならば落とさずには続けることが出来る。

筋肉が温まつてきたところで、地面に赤いカラー「ーン」を並べていく。

軽く柔軟。

まずはボールを蹴らずに身体だけ、ラダートレーニングのようこ細かく腿上げをしながら、コーンの間をジグザグに抜ける。

今度は身体の向きは変えずに、そのまま反対方向へ。

それを何度も繰り返した後は、ボールを使って、同じコースをドリブルで抜ける練習。

「おお、キヨン君。やつてますね。わたしも混ぜて下さい。風呂入つてしまつたけど入り直すから」

「コージが、まだ浴衣姿のままで中庭に入ってきた。

「いいけど、キヨンに君を付けるのはやめてくれや」

恭太はチーム内で、タメ口きくような仲の相手には下の名前をそのまま呼ばれ、田下にはキヨンさんと呼ばれている。どちらも慣れまるでもなくしつくじくくるものがあるが、キヨンと君の組み合わせは違和感凄まじい。

さて、「ローンを並べ変えて三畳ほどの小さな小さな競技場を作ると、二人はボールの奪い合いを開始した。

ボールを持っているのは恭太の方。

まずはコージがどう出るかをじっくり窺うつもりであつたが、動いたと恭太が認識した瞬間には、すでにボールを奪わっていた。そんな速い動きには見えなかつたのに。いや、むしろ、すうつとゆつくり歩み出したかのように見えたのに。

まるで手品を見せられたかのようだ。

奪われた以上は奪い返す。恭太は気を取り直した。

しかし、奪取の能力だけではなく、保持能力の高さも半端ではなく、まったく奪えない。

背を向けてボールを守っているわけではなく、ずっと恭太に対して正面を向いたままだというのに。

仁王立ちになつて、ただ単に足で右に左にとボールを動かしてい るだけだというのに。

それなのに、奪い取るどころかボールにかすことすらも出来ない。

やつぱりこの人、すげえ。本当に、上手だ。

さすがブラジル代表に選ばれただけある。この技術力には、もう舌をまくしかない。

浴衣姿のまま、とこうのが、舐められてるよりむしろヒムカつくけど（といいつつ自分も下駄だが）。

本当に、技術力は神懸かつているほどに素晴らしいが、だがしかし……

「まだまだでーす」

などと負けん気を吐きながらも、コーディは地面に膝を付き両手を付き、へたばつてしまつた。

「あのさあ、引退して、四十過ぎてるからって、その体力のなさは異常じやねえのか。六十過ぎたシニアサッカーのじいちゃんだって、もつと走るぞ」

「いえ、暇さえあれば日本語の勉強していたので」

キン肉マンのビデオで。

しかも動かないと太る体质なものだから、とにかく食事を抑えていた。だからすっかり筋力もスタミナも落ちてしまつたというわけだ。

「もう充分だよ。そんだけ喋れりや。じゃあさ、一緒に走り込みしようや。しばらく泊まる気だつついんなり」

「そうしましょうか」

恭太たちの所属するサッカーチーム、イクシオンACの監督になることが正式決定したコーディであるが、その後も住居を探すつもりが毛頭ないのか、この恭太の宿屋に寄として泊まり続けているのである。

「おい、あれコーディじゃねえの？」

窓から、若い男。さらに奥からもう一人の男が顔を覗かせた。

「はい、コーディです。本物です。へらんちょカーニバルの五島洋司のモノマネじやありませんよ。ぜひイクシオンACの試合を観にきてくださいー」

彼らにぶんぶんと両手を振つた。

「なに宣伝してんだよ、まったく」

それよりなんでへらんちょカーニバルなんかを知つてんだよ。

「「いつか」に上がるんじゃないんですか。お客様に来てもらいつさやかな努力を惜しんでどうしますか。どうせチームが上がつても、自分じゃリーガーにはなれないって思つていいでしょう。所詮地域リーグ、底辺、光つてない、輝いてない。まさか、そう思つていませんか」

「そこまでは思つていないし、思つたとしてそれのなにが悪い。そこまで自信持てる実力があれば、とっくにどつかでプロになつてつづーの」

アマチュアの気持ちも理解しろつてんだ。

二人は練習を引き上げ、中に入つた。

と、恭太の背筋が凍つた。

「いらっしゃいませえ」

みんなの声が聞こえてくる。

玄関から、ぞろぞろと、客が入つて来る。

そうだ、今日は珍しく、団体客が来る日なんだった。

恭太は下駄を脱ぎ、靴に履き替え、そそくさと走つて、迎える列に並ぼうとした。

「イラシャイマセー」

と「ージが浴衣姿で列の中。

「ちょっとお客様あ、こちらへ」

恭太は「ージの耳を引っ張り、ぐいぐいと奥へ連れしていく。

「たいつせつな団体客様なんだよ！ 北海道の偉い人らしいんだよ！ つうかなんであんたの方が先に並んでんだよ！ つうか並ぶなよ！」

恭太は叱つた。自分も危うく顧客データ消去するところだつたくせに。

がつ、と激しく肩と肩がぶつかりあつた。

日野浩一は、ずんぐりむづくり低重心の小熊のような体型を活か

し、バランスを失うことなくさつとボールに駆け寄り、奪い取った。目の前に出来ていいスペースをドリブルで駆け上ると、前線で張っている大城を走らせるようなボールを蹴った。

狙い通りに大城は全力で走り出した。バスを読んでいた橋本英樹が、すつと大城へと身体を寄せた。軽く肩を当て、ボールを奪取。

しかしその後のボールタッチを誤つて大城に取り返されてしまう。すぐさま後を追うが、大城の急加速についていかれず、あっさりとぶち抜かれた。全力で追い縋るが、あと一歩というところで間に合わず、ショートを打たれてしまった。

チョイシングの甲斐もあつてそれは角度のない厳しいところからのショートになつたが、なかなかに狙う場所も弾道も勢いも鋭く、あわやゴールになるところであつたが、GKの吉田健一が身体を倒しながら両手で上手く弾いてGKに逃れた。

「氣い抜いてんなよ」

CBの相棒である後藤権三が、橋本の肩を自分の肩でどついた。橋本は無言のままGKの守備につく。右腿にテーピング。足ならばサッカー選手として分かるが、右腕にも、ぐるぐると包帯を巻いている。むしろこちらの方がよほど重症に思えるが、腕だしプレーにはあまり関係ないだろう。

現在行われているのは練習中のミニゲーム。ハーフコートをつた、八対八である。

本来はフルピッチでやりたいところであるが、人数の関係で仕方がない。Aチームなど、正GKの木場芳樹が仕事で遅れるということで、FPである小笠原慎一が代理をつとめているくらいなのだから。

それでも今日はまだましなほうで、最悪な時など、女子マネージャーの三宅梓がGKをやつたこともあった。何が最悪かつて、偶然なのか何なのかファインセーブミラクルセーブの連発で、それからしばらくの間FW陣がすっかり自信を失ってしまったのだ。

新監督の「コーチはピッチの外で、腕を組んで、試合の様子を見ている。時折指示を出すが、基本は選手任せ。ただニコニコと、笑みを浮かべているだけだ。

CKのキッカーは野木基。

手を上げて合図をすると、軽く助走し、強く、蹴り上げた。山なりに、ファーへ。

待ち構えていた芹沢恭太が高く跳躍、頭で中央へと折り返す。ゴール前中央で、滝本孝と橋本英樹が身体をぶつけあいながら跳んだ。

競り勝った橋本が、頭で大きくクリア。着地すると、そのまま駆け上がった。

クリアボールを拾つた和歌収からパスを受けて、橋本はぐいぐいと上がっていく。

まだ前線の人数が少ない。野木を背負いながら、少し溜めを作ると、反転、ロングパスを反対サイドにいる恭太へと送つた。だが少し力んでしまつたかボールが長くなってしまい、ラインを割つた。

「ハッシー君、いまの一連の、とても良かつた！」

コーチが拍手で褒める。

「でも、連係ミスは仕方がないが、個人のミスはしてはいけない」正論だ。DFが攻め上がる以上、下手な奪われ方をしたら失点に繋がりかねないからだ。

橋本は無言で、自分のポジションへと小走りで戻つていく。

「なんかお前、暗いぞ」

権三が、また肩をぶつけてきた。

「暗くなんかねえよ」

とりたてて明るい性格でもないが、暗くもない。と、思つてゐる。今日だつて普段通りだ。

タッチを割つたことで、滝本のスローラインでリストアート。

恭太は足を伸ばしたが、僅かの差で奪えずに、野木へと渡つた。

野木は単純にロングボールを前線の広田光へと送った。

広田は胸でトラップするとすぐさま反転、ドリブル、しかし次のプレーを考えるがあまりボール処理を誤つてタッチが大きくなり、ゴールラインを割つてしまつた。

吉田の「ゴールキック。近くの橋本へ丁寧にバス。

橋本は、今度は全体を見渡しながらゆつくりドリブルで進むと、大きく最前線へとファイード。

繋がつた。FWの大迫希が、DFをかわして走り出し、上手く足の甲で受けて、ドリブルで独走だ。

俊足というほどでもないが、とにかく腕を思い切り振り、ガムシヤラに、ぐいぐいと突き進む。

ゴール前には臨時GKである小笠原が、腰を落として身構えている。

相手が素人だからか、大道にはGKの姿が、なんだか豆粒のようにな小さく見えた。

行ける！

右足を振り抜いた。

大道スーパー稻妻シューート！

GK初体験の小笠原は、横つ飛び、右手で弾いた。

「ガーネン！」

大道はがつくり地面に両膝を付き、両手を付き、うな垂れた。しかしながらBチームはCKを得た。

キッカーは和歌収。

ボールをセットすると助走し、蹴つた。

ゴール前中央へ。まるで特注申請したかのよう、まさにどんぴしゃの素晴らしいボールが橋本へと渡つた。ほとんどが偶然とはいえ、しかしせつかくそんな良いボールが上がつたというのに、橋本はヘディングを大きく打ち上げてしまつた。跳躍するタイミングが遅れてしまつたのだ。

「ああもう、あんなまたとないボールを外すかなあ。みんなハッシ

一さんは期待してんですからね。よつ、「リーガー一步手前」と大道が、直前の自分のヘマを棚に上げてからかった。

橋本の表情が変わった。

ゆっくりと、大道へ近づいてきた。
どん、と胸で胸を突き飛ばした。

「ふざけんなてめえ！」

橋本は、いきなり切れたように叫んび、掴み掛かった。取つ組み合いになつた。だが、体格差が大人と子供。橋本の腕力の前に、大道はまったくかなわず、いいように髪や鼻を引っ張られている。

「いてて、鼻いて！ ちょっと、なんで？ なんで怒んの？ ふざけてないつつうか、ふざけんのおれのキヤラでしょ！」

大道は必死に振りほどこうともがく。

「ふざけてんのはお前の名前だけで充分だつての」

お笑い芸人の山田山田かつつーの。

「あ、あ、それいつちやいます？ いてていて、頭を拳でごりごりすんのやめてください、禿げる！」

「おい、お前らしい加減にしやがれ」

日野浩一が仲裁すべく二人の間に入ろうとするが、かつとなつている橋本にどんと胸を突き飛ばされ、

「ぶつ殺すぞてめえら！」

一瞬で沸騰し脳の血管がブチ切れてしまつた。仲裁するどころか野太い叫び声をあげながら二人の胸倉をそれぞれぎゅつと掴んだ。

「やめろやめろ」

芹沢恭太が日野の手を離し、大道と橋本との間に身体を入れて両者を引き離した。

橋本は、まだ興奮したようではあるが、すっかりおとなしくなつてている。

「なんでおれが間に入るとなりますますヒートアップして、キヨンさんがこうと収まるんだよ」

「知るか」

「くそ。あつたまくんな。つうか、そもそもくだらない喧嘩してんじゃねえよ」

日野は、橋本の胸を軽く押した。

橋本は、日野の極道映画のような表情や声にまつたく動じることなく、呆然とした表情で突つ立っている。と思うと、突然大道の身体を抱きしめた。

「ごめんよダイドーごめんよ。おれのかわいいダイドー。鼻つまんで引っ張っちゃつたりして。梅干ぐりぐりしちゃつて」

「いや、おれハッサーさんのものじゃないんですけど」

3

「つまい！」

日野浩一はビールを一気に飲み干すと、口から泡を飛ばしながら

叫んだ。

上機嫌である。

練習中のミニゲームではあるけれど、三点も決めたからだ。

ここは居酒屋兼家庭料理の店、ふうりん。

後藤権三が経営している店で、イクシオンACの練習場から徒歩でそれほど遠くないため、練習後に飲みに行く場合にはここを使うことが多い。

現在夜の九時。仕事帰りの中年サラリーマンたちを主として、学生だけ女性だけのグループもあり、店内は非常に賑わっている。

イクシオンACの選手たちはほとんどが二十代、しかも前半の者もいるというのに、どちらかといわばとも中年サラリーマンたちと同列の存在感を放っている。顔馴染みが店をやっているところからくる態度の大きさも原因かも知れないが、単純にチームにそういう人種が多いということだろう。

「他人のビールもうまい！」

日野は、半分残った和歌収のジョッキをひったくると勝手に空け

てしまつた。

「お前はビールがクソまずいだろうな」と、大道大道に舐めるような嫌らしい視線を送つた。

「ちょっと、ちょっと、ノッコさん、なに調子に乗っちゃつてんですか、たかだか練習でゴール決めたくらいで。男は本番で結果出しゃいいんですよ！ おれ開幕戦、決めてんじやないですか」

今日の練習で行われたミニゲームで大道は、味方から良いパスを何度ももらつたというのに外しまくつて、一点すらも取ることが出来なかつたのだ。GKの木場が仕事で遅れるということで、代わりにFPである小笠原がGKをつとめていたというのだ。

「そうして過去の栄光に縋り付いてるがいい。来年になつても、『おれツ、こう見えて去年の開幕でゴール決めたんだぜっ』」

日野は大道をおとしめたいのではなく、単に自分を褒めたいのである。ボランチで三点取つた自分を。

「あの一発だけなわけないでしようが！ これからだつて、点取りますよ。取り続けますよ。だいたいビールうまいもなにも、ノッコさんは味覚が鈍いから気分よければなんでもうまいんすよ。うまい！ つて味も分からないくせにジョッキ突き出してまあかつこつけて。犬のオシッコでも気付かなくせにさあ。ゴンさん、ノッコさんだけこつそり発泡酒にしちやつていいですかからね！」

「お前こそ発泡酒にしたほうがいいんじゃないか？ 金ないだろ？」 純仕としてあくせく働いている権三が、両手に重たそうなお盆を持つてよたよたとやつてきた。仕事抜け出してサッカーをさせて貰つている分だけ、普段は頑張つて働かなければならぬのだ。

「まだ退職金があるから飲めますよ。あと二回くらいは」

大道は半年ほど前に人材整理でバッサリ切られ、退職金も雀の涙、現在近所のコンビニエンスストアでアルバイトをし、貯金を切り崩しながら就職活動中の身である。

「なに、お前、シンを相手に決定機を外しまくつたんだつて？」

木場芳樹。仕事で遅れて今日のミニゲームには参加出来なかつた

が、チームの正GKである。

「ああもつー。なんで蒸し返すのかな。いちいち聞かなくたって、もつさんの話聞いてりやあ分かるでしょ。」

大道はがりがりと両手で頭を搔いた。ファンディングさん、落ち着いた大人っぽい外見のくせして、たまにこいつやつて子供のようにチクチクくるからやんなるよな。

「そりいやハッキーの奴、むすつとした顔のままさつと帰つてしまつたけど、なんかあつたのか？」

木場が尋ねる。

「なんかあつたもなにも、なんすか、ありや。今日のハッキーさん、すつげー氣色悪い。人の鼻ぐりんぐりん摘まんで引き回しておいてさあ、いきなり抱きしめてくるんですよ。ダイドーかわいいよダイドーつて。練習終つたら口もきかないで缶ビール買つてとつとと帰つちやうしさあ。ジユース一本くれたけど」

「遅れました。ちょっとタツヤに寄つてたので」

大道がこぼしていると、コーディが店内に入ってきた。アニメかテレビゲームの本でも立ち読みしていたのだろうか。

空いている席につくと早速、ビールと枝豆とプリンを注文した。「ダイドー君、大声で楽しそうになんの話をしていたんですか？」

「氣味悪がつてるだけつすよー。ハッキーさんのことさあ」

大道は、今日の練習中に起きたことを話した。コーディも遠くから見ていたが、会話など細かなやりとりまでは知らないからだ。

「そんな感じで、今日は最初からなんか変な感じでさあ、で、コーデー外した時だつたかな、おれが、いよつゝリーガーがーつていつたら、急にブツツとなつちやつて。ほら、ハッキーさんつて、もどーF」

で、しかも……その、あれだから……相当フレッシャーやらコンフレックスやらで苦しかつたのかな、つて、悪いこといつちやつたかなとは思つてるんだけど。あんなキレちゃうくらいだから」「いや、そういうことならたぶん恋の悩みでしょ。」

「コーデはあつさり断定した。

「 いら、 そこ の オッサン ! いま の われ の 話 で なん で そ う こ う 結論 に なる かなあ 」

大道は 脱力 し て 机 に 突つ 伏 し た。

4

夜道。 空 に 雲 は ほとん ど な く、 真 っ 白 な 満月 から 光 が ぎらぎら と 振り注い で いる。

橋本 英樹 は 一 人、 歩 い て いる。

右 腕 に まか れ た 包帯 に 手 を や る と、 ひきひき る よ う に 取 つ て し まつた。

くつきり と、 動物 の 齒型 が つ い て いる。 ぼつぼつ と 紫色 の 痕 が 出 来 て い たり、 皮膚 に 牙 の 穴 が あ い て し まつ て い たり、 酷 い 有 様 だ。 橋本 は、 昼 間 は 動物 病院 で 働 い て い る。 獣医 の 助手 だ。 避妊 手術 を す る 中型 犬 の、 腹 の 毛 を 剃 ろう と し て い た と ころ、 迂闊 に も 診察 台 から 逃 げ られ て し ま い、 病院 全体 大騒動。 運 の 悪 い こと に 来客 が 開けた ドア から 外 に 逃 げ て し ま い、 大 通 り に 飛び 出 す 直 前、 なん と か ラグビー の タックル の よ う に 飛び つ い て 捕まえた の だ が、 その 際 に 必死 の 抵抗 を 受 け て 腕 を 噛ま れ て し ま つた の だ。

そ れ が、 今 朝 の こと で あ る。

酷 い 怪我 とい われ れば まつたく もつて そ の 通 り で あ る が、 そ れ よ り 何 よ り も 恥 ず か し く て、 一 日 中 ずつ と 包帯 を ま い て い た。 ノッコ (日野 浩一) の バカ に、 くつきり 齒型くん と か 齒型 王子 と か ふざけ た あ だ名 つ け られ そ う な も 嫌 だ つ た し。

そ ん な 感 じ に 仕事 は 散々 で あつた し、 そ の 後 の チーム 練習 も ど う に も 気 が 乗 ら ず、 そ れ ど こ ろ か つま ら な い 喧嘩 ま で し ま つた。 おれ、 今 日 は 本 当 に、 ぼー つ と し て い る よ な。

無理 も、 な い か。

だつて ……

家 に 着 い た。

古 び た 木 造 二 階 建 て アパート。 一 階 真ん中 の、 2K の 部屋 で 彼 は

一人暮らしをしている。

ドアを開けると叩き付けられた猛烈な勢いでカビ臭さが襲ってきた。歴代住人が蓄積してきた元々の臭いだけでなく、橋本自身も相当にカビを発生させるような生活をしているからだ。冷蔵庫の横にあるビニール袋の中に田舎から送つてもらつた八朔が入つてゐるのだが、当初は綺麗なオレンジ色であったがおそらくいま袋をひらけば毒々しい青ミカンだ。

サッカー雑誌やらエロ本やら食べ終わつたカップ麺のカップやらの散乱している部屋の中央には万年床。そこにじつかり腰を下ろすと、リモコンを手に取りテレビをつけた。お笑い番組がやつてゐる。買つてきたビールを早速一本開け、一口。

酔いも回つていないうのに、いきなり叫んだ。

「どじがやねーん！」

などと、突つ込むんだろうな。ダイドーなら、がはは笑いしながらさ。

あいつはさ、ほんと明るいよな。それだけでも、おれにとつては本当にたいしたものだ。酷い振られたを何度も経験しているつていた。具体的にどう酷いのか、酒の席で笑いながらに話をしていたけど、それを聞いた時、おれちょっと振るえ上がつた、おれならきつと自殺してゐるなつて。百歩譲つて死なないまでも、少なくとも新しい恋なんか絶対にしない。

番組がつまらないのでチャンネルを変えた。

結局、他のどの局も面白くないのでテレビを消した。

ビールも飲み終えだし、寝ることにした。

ごろんと横になる。

横になつたところで、つまみを買つ忘れたことに気づいた。
いいや、いまさうもつ。

田を閉じた。

そのまま何分かが過ぎたが、しかし睡れない。寝つきは相当にいいほうなのに。ビールも飲んでいるし、絶対に睡れるはずなのに。

上半身を起こした。

傍らに、もう一本ビールがある。帰ってきて冷蔵庫に入れるのを忘れたものだ。それを手に取り、開けた。

「ぶちゅぶちゅ」と泡が出てきて、すぐにそれを口を当てて吸つた。
一本目ですらちょとぬるくなつていたくらいなので、こりらはもつほとんど常温。

ベルギービールみたいなもんだ、と無理矢理自分を納得させようとすると、当然というべきか、全然美味しいくない。

ビール缶片手に立ち上がつた。

ちょっと味に変化をつけようと、キッチンにある醤油を、缶の飲み口にちょーっと垂らしてみる。

「では、あらためていただきまーす」

口に含んだとほぼ同時に、ぶふつと噴き出した。

「金返せ畜生！」

ひでえ味だこれは。殺人的なまざさだ。

捨てるのももつたないので、根性で飲み干した。
くらくらする。

気持ち悪い。

バカなことした。

万年床の上に戻り、掛け布団の上から、横になつた。

しかし、やはりなかなか眠れない。眠れないでいるうちに、最初に飲んだビールが、おしつこになつてきた。

トイレ面倒だけど、行くか。メーカーもアホだよな、利尿作用のないビール作ればヒット間違いなしなのに。

外に出て、建物の端にある共用トイレで用を足すと、手も洗わず戻ってきて、また掛け布団の上に横になつた。

天井からぶら下がつている電球が、かすかに揺れているのに気づいた。

上から、ぎつちぎつちと軋むような音。だんだんと大きく、はつきりと聞こえてきた。

確かに真上の部屋には若夫婦が住んでいる。

くそ、平日の夜だつてのに。

話で天井ついたろか。

どうでもいいや。他人のことなんか。

ふう。とため息をついた。

つて、なにがふうだよ。なんに対して。サッカーか？ なんだ？ 考えるまでもない。おれの、全部がだよ。

橋本は、去年の夏にこの北海道へ、イクシオンACへとやつてきた。それまでは、地元である石川県のJFLのクラブにいた。

守備力強化のために是非と乞われて、二つも上のカテゴリーからやつてきたわけだが、実をいうとJFLの試合に一度も出場したことがない。それどころかベンチを温めたことすらもない。それを承知の上でクラブから頼まれ、移籍を決断した。

こここの選手とは、誰ともその話はしたことはないけれど、きっとみんな知っているのだろう。JFLなんて、試合記録を見ることが多い誰でも簡単に出来るのだから。

その頃、彼女がいた。

移籍で石川県を離れる際、少し距離を置いつかと自分から話を持ち掛けた。要するに、別れようということ。もしもいつかまためぐり合つて、その時にお互いに相手がいなかつたらまた付き合つこともあるかも知れないが。

それからずつと、後悔しているようないしていないような、自分でも自分の気持ちが分からぬ。あの時どんな気持ちだったのか。いま現在、どんな気持ちでいるのか。

でも、あの劣等感の塊だった自分に、北海道までついてこいなどといえる勇気はなかつた。

せめて、一試合でも出でていれば、また違つていたのだろうか。

とにかくもう、あたらしい彼氏を見つけていたことだらう。もう終つたことだ。

そう思つていた。

しかし、自分の中では何も終つていなかつたのだ。

自分の心が、まさかここまで弱いなどとは思つてもいなかつた。

石川県の友人から久しぶりに電話があり、その友人から、彼女が知らない男と一緒にいるのを見たと聞いた。

手を取つて引っ張つたり、気軽にボディタッチをしていてとても仲が良さそうだった。

どくん。それを聞いた橋本の心臓は高鳴つた。

間違いない。

それは新しい彼氏だ。

間違いない。

昨日の晩の電話である。

それで今日はこの様だ。

「くそ。眠れねえ」

立ち上がつた。

利尿作用のないビール作ればいいのに。つづか上、銛で突くぞ。

5

ショートを打たれた。

完全にノーマークにしてしまつていた。崩されたわけではなく、単なる個人の判断ミスから。それでもGKの木場芳樹は鋭い反応を見せ、横つ跳びで食らいつこうとしたが、その頑張りも虚しくボールはグローブの指先を弾いてゴールの中へと吸い込まれた。

後半二十分、1-1。

前半に、カウンターが綺麗に決まって大城のゴールで先制したイクシオンACであるが、そのリードを守り切ることが出来ず、同点ゴールを許してしまつた。

五月二十七日 日曜日

帯広市営陸上競技場

道東ブロックリーグ第一節 すずらんファイターズ 対 イクシ

どんどんどんどん、すずらんファイターズのサポーターの太鼓が鳴つた。

細い黄、緑、黒のストライプのユニフォームレプリカ、二十人ほどのすずらんファイターズのサポーターたち。赤色のレプリカ、アウエイであるはずのイクシオンACの方が十倍は多い。北海道を分割した狭い地域の中で行われるリーグだけあって、ホームかアウエイかはそれほど関係なく、とにかく存在するサポーターの絶対数がおおよそそのままゴール裏の人数として表れるのである。

木場は地面を叩いて悔しがっている。届かなかつたわけではない。グローブに確かな感触があつただけに、なおさら悔しさが倍増する。その近くでは、CBの橋本英樹が呆然と立ち尽くしている。

失点は、橋本のミスからであった。相手の蹴つてきた単純なロンゴボールを頭で跳ね返そうとしたところ、処理を誤つて相手FWに渡してしまい、そのまま持ち込まれてシュートを打たれてしまったのだ。

イクシオンAC、ボールでキックオフ。

大道大道は、横にいるツートップの相方、大城政へと転がした。相手が走り寄つてきたのを引きつけ、大城は大きく蹴つた。

芹沢恭太がサイドを駆け上がり、ボールを受けた。

同点にされた焦りが無意識にあるのか、恭太は二人に囲まれながらも無理な突破を図つて結局ボールを奪われてしまった。

すずらんファイターズのボランチ米本将吾はサイドライン際をドリブル。速度を緩め、SBのオーバーラップを待つが、その前にイクシオンACのボランチである日野浩一が雄叫びをあげながら背後に密着してきた。後ろから伸びてきた足に蹴り出されて、スローインになつた。

とりあえず難を逃れたイクシオンACであったが、しかし、そのスローインを基点に細かなパスが繋がつて、あつという間にゴール

近くまで運ばれてしまった。

そして、CBの後藤権三が、相手FWの鈴木達雄に抜かれてしまった。

「ドアホ！」

権三は叫んだ。

橋本英樹がぼーっと残っていたせいでオフサイドトラップを仕掛けたのに失敗したからだ。

斜めから、全力で腕を振り橋本が向かう。絶対的なピンチになるかと思われたが、鈴木達雄がボールタッチを誤つてしまい、その間に追いつくことが出来た。

橋本と鈴木達雄、対峙はほんの一瞬であった。

橋本は本職DFだというのに鈴木のフェイントにあっさりと引っ掛かって、いとも簡単に抜け出されてしまったのだ。

そして次の瞬間、鈴木は地に転がつた。

笛が鳴った。

腕を引っ張り転ばせたとして、橋本にイエローカードが出された。橋本は、いらっしゃったような、申し訳なさそうな、そんなやりばのない顔で、足を踏み鳴らした。

普段の橋本と比べてあきらかに調子が悪い。まあ、ここ数日の橋本を見ている者からすれば、やつぱりなことなのだが。

守備の要であるCBがこのような調子だというのに、1-1というスコアだけを見ればしつかり戦えているように見えるが、それはさほど不思議なことではない。単純に相手チームのレベルが低いからである。開幕戦である前節も、というシーズン前降格候補を相手に9-0の大差で負けているのだから。

つまり、イクシオンACが前半に先制したのであれば、相手が引いて守れなくなつたのを利用して、四点、五点、六点と置み掛けられなければならないところなのである。これはあくまで、リーグを目指すチームの気の持ちようの話というだけであるが。イクシオンACにしても、残留争いをした去年と同メンバーということで世

間的にはすずらんファイターズとビックリードの評価なのだから。

イクシオンACの監督、コーデは何を考えているのか黙つて腕組みをし、戦況を見つめている。

そのすぐ近くで、控えDFの滝本孝がどうにも焦れつたいといったオーラを盛んに発している。

さもあるう。いくら橋本が元JFL所属の選手であるらうと、現在ピッチ上でご活躍なされているあの有様よりも自分の方が下に見られているのではたまつたものではない。（負けこそしたが）コーデの初戦でのあの魔術のような采配を見ていなかつたら、とつくなつて文句をいつていたことだらう。

そんな滝本孝の思いなどは知らず、橋本の絶不調なプレーはなおも続く。

「てめえ、ふざけてんじやねえよ」と、珍プレーを見せられる度に怒鳴り、叱咤していた後藤権三であつたが、なおも酷さの加速の止まらないこの状態に、もう何もいえなくなつてきた。見ていて、なんだかあまりに哀れで。監督も、替えてやりやいいのに。

また、気の抜けたプレーであつさりと抜かれかける橋本であつたが、権三のフォローで、なんとか持ちこたえてなんとか必死のクリア。

運良く失点しなかつただけで守備陣ボロボロだというのに、元凶たる橋本本人が、自分のクリアしたボールを追つて前方へと走り出した。不様なプレーで失つた信頼や自信を取り戻そうといふことか、完全連携無視の無謀な攻め上がりであつた。

結果は案の定。クリアボールは相手に拾われ、がつぽり空いた守備の穴へと大きく放り込まれ、橋本の攻め上がりはただ単に大ピンチを招いただけであつた。

左右のSBも慌てて下がるうとするが、それより問題は中央だ。たまたま前日のポジションを取つていたすずらんファイターズの攻撃陣が、このチャンスを逃すなどばかり三人、四人と上がってきて

いるというのに、迎え撃つDFが権三一人しかいない状態なのだから。

大波にざんぶり飲みこまれる小人。この人数差の前に権三一人では、攻撃を遅らせることも、パスコースを邪魔することも、どうしようもなかつた。

中途半端なポジションのままずるずる下がるだけの権三の前で、松浪裕太から鈴木達雄へと横パスが繋がり、ついにシュートを打たれた。完全ドフリーの、ぽつかり空いたゴール真正面から。

鈴木のシュートは蹴り損ねたのか少し威力が弱かつた。それでもしつかりコントロールされ、隅の隅をしつかり捉えており、木場が横つ飛びで指で触れ、弾き出してみせたことは充分にファインプレーといつて良いだろう。

「ダメかと思った」

権三、熊のような顔を複雑に歪めて安堵のため息。

ちらり、と守備に戻つてくる橋本の顔を見遣つた。やつぱりここはバカヤロウとガンといつてやるべきだろうか、と迷つていると、

「バカヤロウ！」

既に日野浩一が、橋本の頭をガスガスガスガスと容赦なく小突いている。

「やめろノッコ、ハッシーだつて生きてるんだぞ。感情があるんだぞ」

すずらんファイターズのCK、キッカーは緑川輝夫。

小さく助走し、蹴つた。

山を描き、ゴール前の混戦の中へ。

真ん中で橋本と山田久が身体をぶつけ合い、跳躍した。

ゴツ、二人の頭がぶつかり、鈍い音が鳴つた。

橋本は着地と同時に、力抜けたように倒れた。

ぴよぴよぴよぴよ

無数の天使が輪になつてくるくる回つている。

打ちどころが悪かつたのか、大の字になつて完全にのびてしまつ

たようだ。

ボールは間一髪のところで恭太がクリア。

こぼれを大城が拾つたが、すぐタツチラインの外へ出した。橋本がまだ起き上がりでいるからだ。

担架が呼ばれた。

おれ、もうだめだ……

真っ白で何も見えない世界の中、橋本はそう思った。その時である。

「ヒデ君！」

彼女の声が聞こえた。いや、正確には元彼女の声だ。朦朧とした意識の中に、はつきりと飛び込んできた。

しかし、なぜだ。

なぜこんな北の大地に、石川県にいるはずの彼女の声がああ、そうか。

おれは、もうじき死ぬのか。いわゆる走馬灯というやつか。

悔いのない、人生であつたろうか。

おれの山河は美しかつたであろうか。

否。

悔いばかりある、人生だつた。

だが、人はそれでいいのではないだろうか。

無から生まれ、有を残して再び無に帰す。

それはすなわち、有から生まれ有に帰すということと同じではないか。

素晴らしい人の人生、おれの人生。

「ヒデ君！」

彼女、吉澤悠子の叫び声に、橋本は、うつすらと目を開いた。

「うわ、本当にいる！」

飛び上がつたのも無理はない。去年別れた彼女の姿が、観客席の中にあるのだから。周囲に人のほとんどいないバックスタンド席、見間違えるはずはない。

なぜこんなところに。

しかし悠子……あれから一年近く経っているといつにまつたく変わつていな。

新たな恋人と、うまくやつてゐるのだろうか。それとも、うまくいつていなかから、思わずこんなところへきたのだろうか。いやいや、うまくいつてないはずないだろう。友人の報告では、仲良さそうだつていついたではないか。

いやいや、終つたことだ。

悔いある人生で結構だ。

ああ、結構だ。

「あんた、そんながばつと起き上がりつちやだめだよ。頭やつちやつて倒れてたんだからさあ、早く病院に行かねえと」初老の主審が近寄つてきた。

「いえ、行きません」

きつぱり断つた。ノーサンキューだ。

病院などに行つたら試合に出られないではないか。自分でもよく分からぬが、橋本の心は燃えていた。内側から、懇々と力が沸き上がつてきていた。無性にチャレンジしたい気持ちであつた。

これまで自分の内面になかつたその感覚に驚くとともに、それがとても心地好かつた。

結果どうなるかは時の運だけど、

とにかく、悠子に不様な姿は見せられない。

だつて、おれとの思い出も、良き一ページだつたと思えなきや、お互い、あまりにも悲しいじやないか。

橋本は突然に雄叫びをあげると、両の拳で、自分の顔面をばかすかと殴つた。

「おれさ、生まれ変わつたかな」

心境の変化などそんなリアルタイムに他人に分かるはずもないと、いうのに、つい権三に聞いてみた。

「生まれ変わったもなにも、酷い顔になつてんぞ、バカか」
すずらんファイターズのスローライン。日野が背後から足を出して
上手に奪つたが、横から近寄ってきた田中勇に、すぐ奪い返されて
しまつた。

田中勇はロングボールで一気に前線へ。
走り出す鈴木達雄。

オフサイドはない。

絶妙の飛び出しを見せたかに思われた鈴木であつたが、気付けば
橋本がぴつたりと密着している。

鈴木の方が先にボール落下地点に先に入り込んだが、先にボール
に触れたのは橋本であつた。長身に加えてその高い跳躍力で、鈴木
の頭の上から樂々と跳ね返して、味方に繋げた。

観客席から拍手が起きた。

「そんな単調な攻めが通用するかよ」

今の今まで通用していたからこそだといつのに、橋本は知らぬ
顔で大威張り。

日野は緑川輝夫を引き付け、恭太へとパス。
恭太はサイドを疾走し、ひらり米本将吾をかわすとセンタリング
を上げた。

ゴール前ど真ん中、走り込んだ大道がジャンピングボレー。完全
に枠を捉えていたが、しかしGKの読みと必死の横つ跳びで弾き出
されてしまった。

「完璧だつたのにニヨニヨ——」

大道は両手で頭をかかえ、悔しがつた。

しかし、イクシオンACはCKを得た。

権三、橋本、長身の選手たちが上がつてくる。
キッカーは和歌収。

助走し、蹴つた。

ゴール中央、田中勇はクリアしようと跳躍した。

田中勇は身長百七十八、決して小さくはないのに、しかしそれよ

り遙かに高く、橋本の頭があった。

「橋本アクトツー！」

上空から、頭を激しくボールに叩き付けていた。

さよなら、悠子。

決別の、逆転、ゴール。

そして、試合終了を告げる笛が鳴った。

6

「1、2、3、ダーニーッ！」

橋本英樹はゴール裏のサポーターたちへ向かって右腕を突き上げ、張り裂けんばかりに絶叫した。

歓声、拍手で応えるサポーターたち。どんどんと太鼓の音。

「うじうじしてた奴が、なんだか変わりすぎじゃねーかよ」

権三が橋本の頭を肘で小突いた。

「うじうじなんか、しちゃいねえよ」

橋本はゆっくりと振り向き、バックスタンド中央へと視線をやつた。

そこには、元彼女の吉澤悠子。そして、さつきは気付かなかつたが新彼氏と思われる風貌の男がいる。

友人のいつていた通り、確かに仲の良さそうな二人に思える。なんだか兄妹みたいに顔立ちが似ているしな。

新たな男の存在を視認したことで関係の完全終局を感じた橋本であるが、しかし心は晴れやかであった。

面はおれのほうが少しハンサムだけど、ま、やさしそうな彼氏じやないか。

いいんじゃないか。

それで、彼女が幸せになるのなら。

そう心に呴きながら、バックスタンド中央へとフロンス沿いをゆっくりと歩き出した。

彼女も階段を下りて座席の一一番前までやってきた。

橋本は足を止めた。

一人はアーチス越しに向き合い、見つめ合った。

久し
ぶり

「そうですね。先に口を開いたのは、橋本であつた。

皮女は心ざ

彼女は恥ずかしそうに軽い笑みを浮かべてゐる

ジルは驚いたりしても、ショックなど

人生を、選択を、応援出来る。だから橋本は心から微笑み、尋ねて
みた。

「うん。ちょっと家族旅行で、ここに来てね。お父さんお母さんはいま別のところ行ってるんだけど。あ、あれ、あたしのお兄ちゃん」

「彼女は、後ろにいる男を手でさした。

— ८ —

びっくりした橋本、あまりの凄まじい大口にアゴが外れてぐつさり地面に突き刺さった。

彼女は橋本の腕をくいと引つ張つた。そして橋本の耳に、そこと口を近付けた。

「距離置いのなんていわれたけど、距離なんて、置けるわけないよ。遠距離なのは平気だけど、我慢、出来るけど、心は、離れたくない」

囁くよつて、はつきりといつた。

橋本は、しばしほうぜんとしていた。

はつとしたかと思うと、急に顔が真っ赤になつた。

「お、おれ、必ず、迎えに行くから。もつと、大きくなつて、いや、
その、色々としつかりしたら、必ず。だから」

じぶんもびぶんなが、ひらも、なんとか思いを伝えようとする橋本であつたが、途中でまつたく言葉が出なくなつた。顔をくしゃくしゃに歪め、泣き崩れてしまつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5634t/>

きらりキラリ

2011年8月13日03時29分発行